

国立国語研究所学術情報リポジトリ

福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系：
福島北部調査報告（1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 友左, WATANABE, Tomosuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001754

福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系

—福島北部調査報告 (1)—

渡 辺 友 左

この報告は、わたしが国立国語研究所第4研究部第2資料研究室で、昭和40年度以降飯豊毅一室長と共同で研究している課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」(以下、調査地点の名前をとって、福島北部調査と略称する)について、わたしが現在までの間に分担してきた調査研究の一部をまとめたものである。

福島北部の調査の計画の概要については、飯豊室長が昭和40年度国立国語研究所年報に報告してある。かいつまんで言えば、この調査は、戦後急激な速度と広範囲な規模とで進行してきた、そして今後もこれに劣らぬ速度と規模で継続して進行するであろう我が国の広い意味での社会変動が特定方言社会の社会構造と地域住民の生活にどのような変動をひき起してきたか(将来ひき起していくか)、そして、その変動の全体的な仕組みがその方言社会の言語体系や言語生活の体系にどのような変動をひき起してきたか(将来ひき起していくか)を、福島北部方言社会の一、二の特定地域社会について記述していこうとするものである。テーマを「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」としたゆえんである。

しかし、このためには、その福島北部方言社会の特定の村落社会の社会および言語・言語生活のそれぞれの構造が現在までどのように変動してきたか(将来どのように変動していくか)の事実を詳細に記述していくことが必要である。そして、そのためには、さらにその変動する主体としての社会・言語・言語生活のそれぞれの構造を、それぞれの特定の時点における共時論的な体系の問題としてできるだけ詳細に記述しておくことが必要である。社会・言語・言語生活のそれぞれの構造や体系の変動、および社会構造と言語・言語生活の関係にからまる一連の問題は、この実証的な記述の作業を通して自然と明らかになっていくことが多

いだろう。

この報告は、以上のような観点に立って、昨年から着手した、福島北部方言社会の言語体系のうち語彙体系を主として標準語のそれと対比させながら明らかにしていこうとする試みの第1の小区切りである。

第1部 福島北部方言の親族語彙の体系（付、年齢階梯語彙）

① 第1部は、福島北部方言の親族語彙を標準語の親族語彙と対照させながら、体系的に記述してみようと試みたものである。なお、必要によって各地方言の親族語とも対照させた。

② ここで福島北部方言というのは、児玉卯一郎氏『福島県方言辞典』（昭和10年）の福島県方言区画による県北地方方言と同じで、福島県方言の中でも、福島市と伊達(だて)・信夫(しのぶ)の両郡を含む地域で話されている方言のことである。ただし、本稿の主たる資料は、その中でも伊達郡保原(ほばら)町・梁川(やながわ)町・桑折(こおり)町・旧茂庭(もにわ)村(現福島市飯坂茂庭)等、主として伊達郡内のはえぬきの老人層の日常語によった。

③ 福島北部方言と標準語の親族語の意味の世界は、さしあたって次の五つに分けた。

1. 親族
2. 家・家族
3. 夫婦
4. 直系
5. 傍系

まず、親族語とか親族組織とかいう場合の親族という、最も大きなわくを設け、次にその親族組織や親族語彙の意味の世界を構成する重要な核として家・家族というわくを設けた。第3に家・家族の中核として夫婦というわくを設け、夫婦の間に出生する人間の縦と横の関係を抽象して、直系・傍系というわくを設けたというわけである。

④ 以下、それぞれの項目で、福島北部方言にあって標準語にはない単語(俚言)はかたかな書き、福島北部方言にも標準語にも共通してあると認められる単語はひらがな・漢字書き、福島北部方言にはなく標準語にしかないと認められるものは左肩に*印を付したひらがな・漢字書きということで表記した。つまり標準語と福島北部方言との間にある音韻論的な対立は、たとえば、語中語尾の濁音化、イとエ・シとス・チとツ・キとテの混同、ai・ae → æなど、などなどの

問題は、単語表記の上で思い切った形で無視した。方言語彙の表記法として全くラフなやりかたであるが、これは一つには、標準語と福島北部方言の語彙を、方言にしかない単語 \leftrightarrow 方言にも標準語にもある単語 \leftrightarrow 標準語にしかない単語と、方言と標準語の全部の単語を一つの直線(・平面)上に示すことによって、標準語と福島北部方言の語彙的な対立をできるだけ単純な形で明示することをねらったためである。また、一つには、このような音韻論的な対立に関する問題は、この部分の研究分担者である飯豊室長のほりからいずれくわしい報告が提出されることになっているから、一切はそれにゆずることができると考えたためである。

⑤ 同義類義のいくつかの単語が待遇表現の上の違いで対立しているときは、たとえば、A—B—C—Dのように最もいねいな形式Aを最初にして、以下でいねいさの高い順に—で結んで配列した。

I 親族

1.0 親族

① 親族という意味は、人間と人間の組合せをその血縁・婚姻関係という観点から抽象した時に生まれる意味である。つまり親族という意味は、血縁・婚姻関係による人間の組合せであるという点で、他の一切の人間の組合せに関する意味から弁別される。ある人間Aがある人間Bと血縁・婚姻関係にあるとき、わたしたちは、その側面を、他の一切の組合せから区別して、AはBの親族であるとか、AとBは親族関係にあるとか言うことができる。

この場合、人間の単位としては個人と家の二つがある。したがって、人間の組合せには次の三つがある。

個人と個人

家と家

個人と家

つまりAという個人がBという個人と血縁、婚姻関係にあるとき、AはBの親族であると言えるし、Aという家がBという家と血縁・婚姻関係にあるときも、AはBの親族であると言うことができる。また、Aという個人がBという家と血縁・婚姻関係にあるときも、AはBの親族であると言うことができる。

② 親族という意味の広がりには、血族・配偶者・姻族という三つの意味の広が

りの総和と全く同じであって、その間に過不足がない。また、家族と親類の二つの意味の広がり総和と全く同じである。見方をかえれば、同族と姻戚の二つの意味の広がり総和とも全く同じである。下図を参照。

親 族	血 族
	配 偶 者
	姻 族

親 族	家 族
	親 類

親 族	同 族
	姻 戚

つまり血族・配偶者・姻族，親類・家族，同族・姻戚のいずれを指しても、わたしたちは「あれは、……………の親族である。」と言うことができる。

③ 福島北部方言で、この意味を表わす単語は次の3語である。

親族 身内 エンナカ (注1) (番号を付した注は、全部この報告の末尾にある。)

身内 この単語の意味の広がり、親族の意味の広がりと同じである。広辞苑・三省堂国語・例解国語・新選国語・岩波国語辞典等いくつかの現代語辞典では、身内は親類と同義であるとしているが、これは標準語としてもおかしいし、福島北部方言としてもおかしい。親類と身内は同義・同位語であり、親類・親戚も同義・同位語であるが、親族と身内は親類と親戚の上位語である。

標準語・福島北部方言ともに自分の家族をさして、自分の親族・身内であるとは言っても、自分の親類であるとは言わない。また、自分の親類をさして、自分の親類・身内であるとは言っても、自分の家族であるとは言わない。しかし、「身内の者だけで葬式をすませる」「身内の者に相談する」などという場合の身内には、親族と同じく、家族と親類を含むのが常である。つまり、親族と身内は親類(・親戚)・家族の上位語であり、親類(・親戚)と家族は次の項でも述べるように、親族と身内の、同じレベルに立つ下位語であり異義語である。

エンナカ 親族・身内と全く同義の俚言。したがって、これら二つの単語よりも多くの人に多く使用される。(次に多いのが身内。)
「エンナカノ 者ガ アズバツテ親族会議 開ク」などと使う。

柳田先生の『族制語彙』には、このことに関連して、次のような記述がある。福島北部方言と対照させてみて、おもしろい。

ウチナカ 仙台とその周囲の土地では親類をウチナカといふ(東北方言集)。或は姻族をも含めて居るかとも思はれる。ミウチといふ方が現在は普通で、是も一門に限られた

語であったが、今は内外の差を問はぬらしい。

エノナカ 山形県の東村山郡では親類をオヤギマキ又はエノナガともいふ。ナカは仲間
の意と思はれる。此名称も分布は広く、栃木県の芳賀郡などにも親類をエーンナカと
いふ語があるのだが、宮城県伊具郡では、エンナカを姻戚のことだけに限って用ゐて
居る。多分はエンといふ語にひかれた誤解が元であらう。秋田県の由利郡では、親類
をエッカナガと謂ふ。イッケはもと一家といふ学問語なのだが、今は全国に行き渡って
居る(P. 30 ~ 31)

福島北部方言におけるエンナカは、柳田先生のいうウチナカ・エノナカ・エー
ンナカ・エンナカよりも意味が広い。親類のほかには家族までエンナカのさす範囲
の中にはいつてくる。

1.1 家族・親類・イトコなど

① 人間Aが人間Bと親族(エンナカ・身内)関係にあり、さらにBと同じ家
に属しているとき、標準語および福島北部方言では、そのことを抽象して、「A
は、Bの家族である」と言う。また、親族ではあるが、同じ家に属していないと
き、「Aは、Bの親類(・イトコ・*親戚)である」と言う。つまり親類でも家族で
もない親類はない。家族と親類(・イトコ・*親戚)は、同じ親族に属する点では
共通し、同じ家に属さないという点で区別される。

この場合、人間の組合せには、親族の場合と同様次の三つがある。

アノ人ワ	アノ人ノ	親類(・イトコ・*親戚)ダ。	(個人と個人)			
アノ家ワ	アノ家ノ	シ	シ	シ	シ	(家と家)
アノ人ワ	アノ家ノ	シ	シ	シ	シ	(個人と家)

② イトコは、親類または親戚に対応する俚言、したがって、次のような表現
もまったくおかしくない。

アソコノ 家ワ オラエノ イトコダ。

標準語のいとこは、個人と個人の関係にしか適用できない単語だから、このよ
うな使い方はできない。

1.2 マケ・エンルイ・血族・*姻族など

① ある人間がその配偶者以外の親族と血縁・婚姻いずれの関係でつながって
いるかという側面を抽象すると、それぞれ次のような一群の単語がでてくる。な
お、配偶者はマケ(血族)でもエンルイ(姻族)でもない。

血縁関係——マケ 血族 血筋 血統 血縁 一族 *一門 *同族
婚姻関係——エンルイ *姻族 *姻戚 *外戚

このうち方言生活の中で最もひんぱんに使われるのは、マケ・エンルイである。これも次のように使うことができる。

アノ人ワ アノ人ノ マケ(・エンルイ)ダ。(個人と個人)
アノ家ワ アノ家ノ シ シ シ (家と家)
アノ人ワ アノ家ノ シ シ シ (個人と家)

② 本家・分家、大本家・孫分家などの関係でつながっている家と家とのつながりは、全部マケであり、その家族と家族の個々人のつながりも全部マケである。他家にとついだ娘、他家に婿入りした息子もマケである。これに対して、娘が嫁に行った先の婿、息子が婿入りした先の嫁、しゅうと・こじゅうと等はすべてエンルイであり、とつぎ先・婿入り先の家もエンルイである。ただし、とつぎ先・婿入り先で婿・嫁との間に生まれた子どもはマケであって、エンルイではない。マケは、たとえば、次のように使う。「オラエワ 佐藤ノ マケダ」「渡辺マケ」「アノエーワ 肺病ノ マケダ」「ドスマケ(=らい病マケ)」

③ 本家・分家、大本家・孫分家など、一つのマケの内部(マケウチ・マケノウチと言う)では、昔からエンルイとは違って、労働の共同・冠婚葬祭の互助・贈答等、経済・政治・社会・宗教その他日常生活の万般の上で非常に強い結びつきがあるのが普通であった。ところが、マケも末端のほうになると、このような強い結びつきがとかく失われがちで、ただ葬式の時にしか行き来がないというようなことになる。そこで、このような関係の遠いマケを普通のマケと区別して、特別にザランボマケ・葬式マケと言うことがある(ザランボは、葬式の意の俚言)。「アソコノ 家ワ オラエノ マケウチダゲンチョモ ジンツェマ 死ンツマツテカラワ モー ザランボマケダ」

④ 方言の語彙としてみた場合、血縁関係を示す単語はマケのほかに血族・血筋・血統・血縁・一族と、いくつかあるが、婚姻関係を示す単語はエンルイ1語しかない。このことは、マケの内部における相互の結びつきと、マケとエンルイまたはエンルイ相互の結びつきの強弱の現実とおそらく関係があるのだろう。

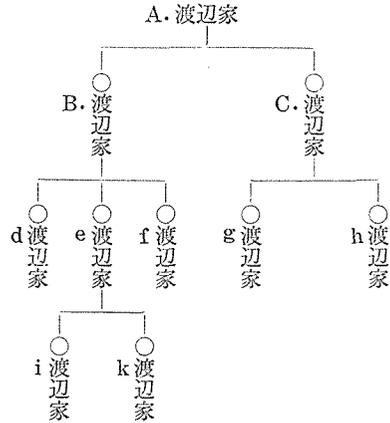
1.3 本家・新宅など

① 親族を家の系譜関係という側面から抽象していくと、次のような一群の単語がでてくる。

大本家 本家 新宅 コシントク ワカサレ ジワカサレ
 隠居 カンキョ *総本家 *分家 *孫分家

② コシントク 本家から見て、新宅の新宅のこと。標準語の孫分家・秋田県北秋田郡方言のマゴベッケ・マタベッケなどにあたる。

③ ワカサレ・ジワカサレ 右の図で、
 Aの渡辺家からBCの渡辺家，BCからそれぞれd e f g h，eからi kというふうに大本家から本家，本家から新宅，新宅からコシントクというように，家が枝のように分かれていくことをワカサレルと言(注2)ワカサレて出た家をワカサレという。ワカサレルときに田地田畑山林等の土地を分けて出るので，ワカサレをジワカサレということもある。なおワカサレ・ワカサレル



は，家の分出の場合にのみ使用し，木の枝わかれや道路・川などの分岐することには使用しない。

「アソコノ 家ワ ドコソコノ 家ノ ワカサレダ」

「アソコノ 家ワ ドコソコノ 家カラ ワカサレタ」

④ 標準語の場合も，福島北部方言の場合も，大本家(*総本家)——本家——新宅(*分家)——コシントク(*孫分家)の系列はあるが，前図でいうと，BC相互，d e f相互，g h相互，i k相互の関係を示す単語がない。つまり個人の関係でいうと，きょうだいの関係にあたるものを示す単語がない。同じように，たとえばd e fとc，g hとBの関係(個人の関係でいうと，おじ・おばとおい・めいの関係)や，d e fとg hの関係(個人の関係でいうと，いとこ同士の関係)を示す単語もない。つまり家と家の縦の系列の関係(直系)を抽象する単語はあるが，横の系列の関係(傍系)を抽象する単語はない。本家——隠居——カンキョというのは，大本家——本家——新宅——コシントクが縦の系列であるのに対し

て、一種の横の系列というべきものではあるけれども。日本の他の地方の方言の場合は、どうだろうか。現に秋田県北秋田郡方言には、アエベッケという単語がある。これは、本家が同一であるベッケ相互の関係をさす単語であるが、このような単語が全国的にどのように分布するのか。それとその背後にある親族組織との関係はどうかなど、これらは今後の調査研究における課題の一つである。

⑤ 伊達郡旧白根(しらね)村(現梁川町白根)では、大本家のことをショーヤとも言う。これは明治以前当時の村(現在の部落や大字)の庄屋は、大本家の当主が世襲していたことによるのだろう。

⑥ 大本家は、また、本家の本家の本家……をさすこともあり、コシントクは、新宅の新宅の新宅……をさすこともある。前図でいうと、Aに対してikもコシントクといい、ikに対してAも大本家ということがある。つまり本家・新宅の意味が絶対的であって、相対的ではないのに対して、大本家・コシントクの意味は絶対的であると同時に相対的でもある。

⑦ ワカサレについては『族制語彙』に次のような記述がある。これによっても、ワカサレの分布は全国的に広いことがわかる。

熊本県の南部でも分家をワカレ又はワカサレ、鹿児島県に入ってもワカサレがあり、又分家することをワカサレルともブンニナルとも謂って居る。大隅の方に行くとラ行子音が落ちてワカサエになり、又短くつまってワカセともいふが、其以外に又ベツニナルといふ語もある。分家別家共にワカサレを漢字で表はしたのが元であらう。(P.60)

⑧ カンキョ・隠居 福島北部方言では、その家の当主夫婦が長男夫婦に家督と主婦権をゆずり渡し、長男夫婦たちとこれまでいっしょに住んでいた家を出て、別の家(普通これまでの家と同じ屋敷の中か、その近所にあり、インキョヤ・インキョゴヤなどと呼ばれる)に移りすむと、その人は隠居と呼ばれる。(注)また、この隠居を中心に新たに形成された家(・家族)も隠居と呼ばれる。これに対して、長男夫婦たちが受けついだ家(・家族)は本家または母屋という。と言うのは、隠居は、隠居する際にはただ隠居夫婦の身柄だけが分出するのではなく、長男夫婦との間で分配した財産の分け前(インキョメーと言う)と二、三男・末子などの子ども、時には自分の弟妹などを連れて分出するのが普通であるからである。隠居は、将来これらの子どもやきょうだいなどに隠居の家を相続させるほかに、場合によっては隠居の財産を分与して、新たに家を別立させることもある。



この場合、隠居を相続する者が隠居家督であり、隠居から財産をもらって別立する者、およびその者を中心に新たに別立した家がカンキョである。つまり本家は、シntaxに対して本家であるばかりでなく、隠居・カンキョに対しても本家なのである。標準語には、このカンキョに対応する単語がない。

(注) 別の家に移りすまないで、長男夫婦と同居しているときは、家督をゆずっても、隠居ではない。ふつうオジンツァマ・オジンツァン・ジッチヤン・ジッチサマ・ジッチなどと呼ばれる。

長男に嫁を迎えると、親夫婦がすぐに隠居する習慣のある土地では、往々にして前の代の隠居がまだ達者でいる場合があり、ここに二重の隠居ができることがある。茨城県多賀郡、宮城県伊具郡ではこのうち新しい方をインキョ、古い方をカンキョと言って区別するという。(『族制語彙』)

しかし、福島北部方言のカンキョはこれと違う。福島北部の村落社会では、隠居の慣行がそれほど強くなく、上にのべたような事態が現実の親族組織の中で生じることがめったにない。したがって、それを示す単語も特別にはない。インフォーマントの中には、この新しいインキョをインキョというのに対して、古い方をオーインキョと言って区別すると言った人が居た。本家——大本家の対立に対応するものだろう。

なお、『族制語彙』には次のような記述がある。

伊豆の大島や御蔵島では、この二重の隠居の中の新しい方をインキョといひ、その又親たちの古い隠居をサンキョと呼んで居る。その老人が既に没して、本家の当主の叔父叔母にあたる者が相続して居る場合にも、やはり之をサンキョといふさうである。(海島民俗誌) 同じ名称は遠く離れて熊本県の天草島、それから南に連なる鹿児島県の島々にも行はれて居り、日向の西諸県郡などでは同じ屋敷の内に、インキョとサンキョが各別棟になって併存するものもある。サンキョは古い言葉で、散居とも山居とも書き、本来は新開分家ともいふべき特殊の分家のことだったらしいが、いつと無く之を第2の隠居の意味に用ゐるやうになってゐるのである。薩摩海上の上甕島などでは、単に兄弟の分れ出た家は、分家と謂って隠居とは言はず、老人の本家の近所に分れるもののみを隠居といふことは東京などと同じだが、唯へヤコ即ち隠居の連れて出た子どもの、又それから分れて一家をなすものだけをサンキョと呼んで居る。伊豆南端の南崎村などで、サンキョは分家から更に分家したものの名だといふのも(旅と伝説 11 巻 9 号) 恐らくは是と同じ趣旨であらう。……

壹岐の島では隠居が二代重なった場合に、前からあるものは其まインキョと謂ひ、

新たに出来た方を中隠居といふ(島民俗誌)。福島県石城郡の入遠野村にも、中隠居といふ名があり、それより今一つ新しい隠居はカンキョと謂って居る。(同村資料) (P48~49)

1.4 *尊属と*卑属 *直系親と*傍系親

① 配偶者以外の親族、つまり血族(・マケ)と姻族(・エンルイ)を本人の世代を基準として、その先後関係を抽象すると、*尊属——*卑属という意味がでてくる。したがって、兄弟姉妹・いとこ、それに配偶者は尊属・卑属いずれの単語のさす範囲にもはまらない。

② また、配偶者を除く親族との系譜関係が直通か否かという側面を抽象すると、*直系親——*傍系親という意味がでてくる。これと①の意味を組合せると、次の四つの単語が生まれる。

*直系尊属 父母・祖父母など

*直系卑属 子・孫・曾孫など

*傍系尊属 おじ・おば、おおおじ・おとおばなど

*傍系卑属 おい・めいなど

③ 尊属——卑属、直系親——傍系親は、純粋に個人と個人の関係についてだけしか言うことができない。

1.5 *親等(*等親)

① 配偶者以外の親族との親族関係が近いか遠いかという側面を抽象すると、*親等(*等親)という単語がでてくる。親子が1親等であり、祖父母・孫・兄弟姉妹が2親等で、おじ・おば、おい・めい、曾祖父母、曾孫が3親等、そしていとこ、おおおじ・おとおばが4親等、いとこおじ、いとこおばは5親等、またいとこは6親等という具合になる。これも1.4の場合と同じく、個人と個人の関係についてしか言うことができない。

1.6 先祖 *祖先 子孫

① 人間の組合せを、ある人を基準として親族の世代的な血縁の系譜関係から抽象し、さらにその系譜関係をその人間を基準として上下の二つに分断すると、先祖——子孫の意味が生まれてくる。これには、次のような単語がまとまりをなして、はいてくる。

先祖 *祖先 子孫 まごこ

II 家族・家

2.0 家族・家庭など

① 親族組織の全体の中から、夫婦を中核として、それに親子きょうだいなど若干の近親者が加わって、日常の生活を共同にしているという関係のまとまりを抽象すると、そこに家族という意味が生まれ、次の四つの単語が類義的なまとまりをなして、浮かびあがってくる。

家族 家庭 いえ うち (いえは、音韻論的な対立によって、しばしばエー・ゼエとなる。)

2.1 家(いえ)

① 日本の家族という親族関係のまとまりがもっている他の一つの側面、つまり家族が祖先から子孫へと超代的に連続する集団であるという側面を抽象すると、家族・家庭とは異なった、制度としての家(いえ)という意味が生まれてくる。

2.2 隠居・*戸主・総領など

家族を家の相続、または家の統括権(戸主権)の相続の系譜という側面から抽象すると、次のような単語がまとまりをなして、浮かびあがってくる。

a ゆずり渡してしまった者

隠居, オジンツァマ・オジンツァン・ジッチヤン・ジッチサマ・ジッチなど

b (ゆずり受けて)現在もっている者

b1 旦那さま——旦那さん——旦那——ダンボ——オヤンツァマ——おやじ

b2 オトツァマ——オトツァン——オトツァ——チャン

b3 ツァツァヤマ(タツァヤマ)——ツァツァヤン(タツァヤン)——ツァツァ(タツァ)

b4 とうちゃん

b5 亭主

b6 あるじ・主人

b7 *戸主・*家長・*家父長

c 将来ゆずり受ける座にある者(長男または長女)

総領 家督 跡とり 跡つぎ *嫡子

d 将来ともゆずり受ける座にない者(二男・二女以下)

オンツァマ オンツァ オバサマ オバ

① 隠居については、1.3の⑧を見よ。

② b1の系列で、ダンボは旦那の俚言。旦那よりはぞんざいで、くだけたニュアンスをもつ。オヤンツァマはオヤジサマの訛り。もちろんおやじよりもいいいな形。

b1の系列における相互に対立した単語の使い分けを規定するのは、もちろん聞き手や話題の人物に対する話し手の尊卑・親疎等の待遇意識である。だが、ここで大事なことは、福島北部方言の場合、他の地方の村落社会の方言とちがって、話し手・聞き手・話題の人物の3者、またはこれらの個々人の属する家の社会的地位(社会階層)の上下の違いということが、話し手の待遇意識を規定する非常に大きな要因にはなっていないことである。

大小の地主や大自作農など、財産・家柄のある旧家の主人は旦那さま・旦那であり、小作農や小自作農の家の主人はおやじであることは事実である。しかし、少なくとも現在の福島北部方言では、このような社会階層の上下による使い分けの規範は必ずしも絶対的なものではない。むしろこの規範から離れた、一般的な待遇意識による使いわけの規範によることのほうがはるかに多い。

つまり聞き手や話題の人物に対して話し手が発話時にもっている尊卑・親疎等の待遇意識によっては、財産・家柄のある大地主の主人もおやじと呼ばれることが多く、小作百姓の主人も旦那さまと呼ばれることが多い。これは、福島北部方言社会の現在および過去(少なくとも江戸時代以降の)における村落階層制の発達の状況、もっとつこんで言えば、資本主義的な商品生産の発達史の状況と深いかわりをもつことなのだろう。福島北部調査の今後における研究課題の一つである。(注3)このことは、b2, b3の系列の場合も同じである。

③ b2・b3の系列およびb4は、父親という意味の単語が、夫という意味を媒介として、家の主人という意味の単語に移行したと考えられるものである。

福島北部方言では、ある家の主人をさして、その主人がたとえ子どもをもっていなくても、「アノ家ノ オトツァマ(・オトツァン・オトツァ・チャン・とうちゃん etc)」と言う。また、主人と、子どものある息子夫婦とが同居している場合、「アノ家ノ オトツァマ(・オトツァン etc)」というのは、子どものある息子ではない。この息子は、家督をゆずられていない限り、たとえ40歳、50歳になっても、また、子どもが何人あっても、子どもがいくら大きくなっていても、「アノ家ノ ムスコ」である。つまりこの場合のオトツァマ(・オトツ

ツァン・オトツァ・チャン・とうちゃん etc) は、明らかに父親という意味から主人・戸主という別の意味に移行してきたものと認めることができる。

④ 亭主は、夫の意味で使うことが非常に多く、家の主人という意味で使うことは非常に少ない。つまり「アノ人ノ亭主」とはよく言うが、「アノ家ノ亭主」とはあまり言わない。

⑤ あるじ・主人は、かなり改まった感じ。

⑥ CとDについては4.15を見よ。

2.3 オカツァマ・ガガ・*主婦など

妻の座にある女性を、妻のもっている他の一つの側面、すなわち妻であって、かつ家庭内の仕事を中心となって処理する役割を分担しているものという側面から抽象していくと、そこに主婦という意味が生まれる。この意味を表わすものとして、次のようないくつかの単語の系列が浮かびあがってくる。

- a オカツァマ 奥さま—奥さん
- b₁ オッカサマ—オッカサン—オッカヤン—オッカ—ガガ・ガッカ
- b₂ ガアサマ—
- b₃ ガッカヤン・カッカヤン—
- カッカ・かかあ
- c かあちゃん
- d *おかみさん *主婦
- e ヨメ・ムスメ

① まずaの系列について。オカツァマは地主など財産・家柄のある上層の旧家の主婦の座にある妻。奥さま・奥さんは医者・教師・駐在所の巡査・会社員などの俸給生活者等、主として旧来の村落社会の中に新たにはいりこんできた都市的職業層の家の主婦の座にある妻をさす。この区別は厳しく、たとえば旧家の主婦が奥さまと呼ばれることは絶対にないし、医者や教師の家の主婦がオカツァマと呼ばれることも絶対にない。また、自作農・小作農など家柄・財産のさしてない家の主婦がオカツァマ・奥さま・奥さんと呼ばれることも絶対にない。つまりオカツァマは、旧来の村落社会の中でも上層の家の主婦にきびしく限定されている。

② 自作農・小作農など、村落社会に旧来からあった中層・下層の家の主婦を

さしている場合は、 $b_1 \cdot b_2 \cdot b_3$ の各系列の単語およびcが使われる。これらの単語の大部分は、その意味の領域が母親という意味から妻という意味に広がり、それからさらに主婦という意味に広がったものである。(これに対して、オカッテマは主婦である妻の意味であって、妻一般ではない。もちろん母親の意味はもっていない。)

中層・下層の家の主婦である妻をさして、その主婦がたとえ子どもをもっていないなくても、「アノ家ノ オッカサマ(・オッカサン・オッカ・ガガ・ガッカ・カッカ・ガッカヤン・ガアサマ・かあちゃん etc)」と言う。

また、主婦と、子どもをもった息子の妻(むことり娘の場合は婿の妻である娘)とが同居している場合、「アノ家ノ オッカサマ(・オッカサン・ガアサマ・ガガ etc)」と言うのは、その主婦であって、子どものある、息子の妻(または妻である娘)ではない。このむすこの妻は、しゅうとめ(むことり娘の場合は母親)である主婦から財布を渡されていない限り、たとえ40歳、50歳になっても、また、子どもが何人あっても、子どもがいくら大きくても、「アノ家ノ ヨメ(またはムスメ)」である。つまりこの場合のオッカサマ(オッカサン・ガアサマ・ガガ etc)は、母親の意味でもなければ、妻の意味でもない。主婦そのものなのである。

③ 医者・教師・サラリーマンなど、旧来の村落社会の中に新たにはいりこんできた都市的職業層の家の主婦だけが奥さまであり、奥さんであるのは前に述べたとおりであるが、 $b_1 \cdot b_2 \cdot b_3$ の系列の単語およびcは、これら都市的職業層の家の主婦をさしても使うことができる。また、上層に属する旧家の主婦をさしても使うことができる。つまり旧家の主婦はオカッテマと $b_1 b_2 b_3 c$ 、医者の家の主婦は奥さま・奥さんと $b_1 b_2 b_3 c$ 、小作農の家の主婦は $b_1 b_2 b_3 c$ と、それぞれの範囲内の単語で呼ばれる。それぞれの範囲内でどの単語が使用されるかは、もっぱら話し手が、その発話時において聞き手や話題の主婦に対してもつ一般的な待遇意識による。この一般的な待遇意識が社会階層の違いということにそれほど規定されていないことは、2.2の場合と同様である。

④ eのヨメ・ムスメは、まだ主婦の座についていない妻をさす。つまりヨメは、婿・しゅうと・しゅうとめに対してヨメであるばかりでなく、主婦に対してもヨメである。また、ムスメは、親に対してムスメであるばかりでなく、主婦に

対してもムスメである。ヨメに対する主婦をオカッツァマのほかにシュートオカッツァマと言うこともある。(4. 18 の①を見よ。)

Ⅲ 夫 婦

3.0 夫婦・* 夫妻など

男Aと女Bの組合せが原則として次の五つの条件をみたしている場合、わたしたちは、その事柄を抽象して、AとBは婚姻関係にある、また、AとBは夫婦であると言うことができる。

ア 性的に結合すること。

イ 経済的に協力すること。

ウ 同棲すること。つまり夫婦は、性的に結合すること・経済的に協力すること・同棲することを原則とする。裏返しに言えば、以上のどれかが不可能の場合、または以上のどれかを夫婦の一方が相当の理由なく拒否した場合、そのどれをとっても、その事は夫婦(婚姻)関係を解消させることができる決定的な条件となる(解消させなければならないという条件でないことは、もちろんである)。

エ アイウの三つのことに永続性があること。少なくとも永続性を前提とすること。(永続性を前提としない夫婦があるかも知れないが、それが夫婦関係の標準的なパターンであるとは言うことはできない。)

オ 仮にインフォーマルな形にせよ、社会的な承認を得ること。(つまり夫婦関係は、社会的な人間結合の一つの型である。)

この夫婦という意味を表わす単語には次のようなものがある。

a 夫婦 *夫妻 *めおと *みょうと

b つれあい *配偶者

① 福島北部方言には夫婦の一語しかない。

② bの単語は、夫婦である者の一方に対して他方を指して言う場合の意味で、aの単語とは異なる。

3.1 *夫・*妻など

夫婦を性別という側面から抽象すると、夫および妻という意味が生まれ、それぞれ次の系列の単語がまとまりをなして現われる。

夫

- a 旦那さま——旦那さん——旦那——ダンポ——オヤンツァマ——オヤジ
亭主——
- b オトツァマ——オトツァン——オトツァ——チャン
- c ツァツァヤマ(ダツァヤマ)——ツァツァヤン(ダツァヤン)——ツァツァ(ダツァ)
- d とうちゃん
- e ムコ
- f *夫 *夫君 *主人 *宿六

妻

- a₁ オカタ・奥さま・奥さん
- a₂ オッカサマ——オッカサン——オッカヤン
- a₃ ガアサマ
- a₄ ガッカヤン・カッカヤン
- オッカ
- ガガ・ガッカ・カッカ・かかあ
- b かあちゃん
- c 家内 女房 細君
- d ヨメ
- e *妻 *おかみ *夫人 *奥方 etc

① 夫をさす単語として日常的に最も多く使われるのは、aの系列である。ダンポ・オヤンツァマについては、2.2の②を参照。おやじは、旦那・亭主よりもぞんざい。この系列の単語の使い分けが話し手の聞き手や話題の夫に対する一般的な尊卑・親疎等の待遇意識によることはもちろんだが、この意識は、必ずしも社会階層の上下の意識に強く支配されたものではない。むしろそれからかなり自由である。(2.2の②を参照。)

② 夫の項のbとcの系列、それにdは、父親の意味から夫の意味へ移行してきたものである。

たとえば、ここにハナと一郎という夫婦があり、この夫婦の間には子どもがなく、夫婦の父親もすでに死んで、居ないとする。この場合でも一郎をさして、「オハナサマ(オハナヤン)ノオトツァマ(とうちゃん etc)」とすることができる。つまりこの場合のオトツァマ(とうちゃん etc)は、父親の意味から夫の意味へ明らか

に移行してきているのである。

③ 妻をさす単語として日常最も多く使われるのは $a_1a_2a_3a_4$ の系列と b である。これに比べれば、 c は使用されることがずっと少ない。

④ 奥さま・奥さんは、旧来の村落社会の中にはいりこんできた都市的職業層の男子の妻だけに限定される。ただし、このことは、都市的職業に従事する者の妻には奥さま・奥さんの二つしか使えないということではない。これ以外の単語が全部適用できることはもちろんである。(2.3の③参照)

⑤ $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdot a_4$ の系列の中での単語の対立は、2.3 の場合と同じく、基本的には夫の、または夫の家の社会的地位(社会階層)の上下による使い分けの規範に基くのかも知れない。だが、少なくとも現在の福島北部方言では、この規範は非常にゆるい。オカタは、地主・医者・先生など、社会階層の中でも上層にはいる者の妻、ガガ・ガッカ・カッカ・かかあは、小作百姓・職人、労務者など下層に属する者の妻、そしてオッカはその中間層にはいる者の妻という使い分けの規範があるという老人もいる。しかし、その老人の日常会話を観察していると、小作百姓や職人の妻でも、その時その時の場面によってオカタということが多く、地主の妻でもガガと呼ぶことが非常に多い。オカタは他人の妻にしか使えないという老人も居るが、中には自分の妻をオカタと言って、何もおかしくないという生えぬきの老人も居る。

つまりこれらの単語は、社会階層の上下による使い分けの規範から離れて、話し手が聞き手や話題の妻に対してもつ、その時その時の一般的な尊卑・親疎・丁寧ぞんざい等の待遇意識に強く規制されているのである。

⑥ $a_2 \cdot a_3 \cdot a_4$ との系列と b は、②の場合と同じく、母親の意味から妻の意味へ移行してきたものである。②であげた例をそのまま使えば、ハナをさして、「一郎サマ(一郎ヤン)ノオッカ(・ガガ・ガアサマ・かあちゃん etc)」とすることができる。つまり、この場合のオッカ(・ガガ・ガアサマ・かあちゃん etc)は、母親の意味から妻の意味へ明らかに移行してきているのである。

3.2 先妻・後妻など

夫婦をその配偶関係の先後という点から抽象すると、次の単語がでてくる。

夫

先 a *先夫 *前夫

後 b1 アトオトツツァマ——アトオトツツァン——アトオトツツァ

b2 アトオヤンツァマ——アトオヤジ

妻

先 c 先妻

後 d 後妻 *のちぞい

e1 アトオカタ・アトオク
サマ・アトオクサン

e2 アトオッカサマ——ア
トオッカサン——アト
オッカヤン

e3 アトガアサマ

e4 アトガッカヤン・アトカッカヤン

f (ゴケ)

アトオッカ アトガガ・アトガッカ・ア
トカッカ・アトカカア

① 福島北部方言では、*先夫・*前夫に対応する単語を欠いている。ふつうマエノオヤジ・センノトーチャンなど、マエノ(センノ)+夫を表わす単語(3.1を参照)の形で示す。

② b1のアトオトツツァマ以下の系列と e1 e2 e3 e4の系列における単語の対立は、3.1の場合と全く同じ。

③ b1とb2ではb2のほうがぞんざい。一般にオトツツァマ——オトツツァン——オトツツァの系列よりもオヤンツァマ——オヤジの系列のほうがぞんざい。以下同じ。

④ fの(ゴケ)については、3.3を参照。

3.3 やもめ・後家など

夫婦をその配偶者の死亡という側面から抽象した意味を表わす単語には、次のようなものがある。

夫

a ゴケ オトコゴケ ゴケオトコ

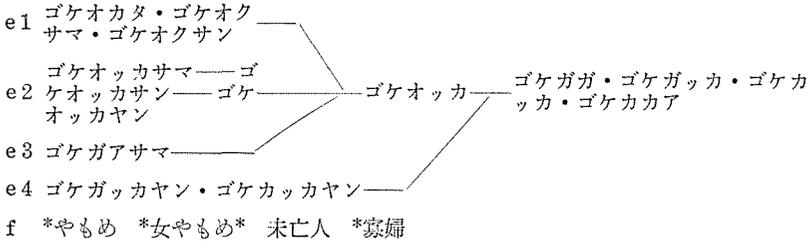
b1 ゴケオトツツァマ——ゴケオトツツァン——ゴケオトツツァ

b2 ゴケオヤンツァマ——ゴケオヤジ

c *やもめ *男やもめ

妻

d ゴケ オナゴゴケ ゴケオナゴ



① ゴケについては、柳田先生が次のように述べている。

ゴケといふ一語にも古今の変遷があったらしく、少なくとも後家といふ漢字は、宛にならぬ宛て字である。東北は一般に、又越後でもゴケは後妻のことで、佐渡の海府では後妻をもらふことをゴケライレルと謂って居り、八丈の島々もゴケイリといふ語がある。従ってゴケが継母の意味にもなり、岩手県などにはゴケガカ、又は継父をゴケオヤゴとさへ謂って居る。所謂後家即ち寡婦の所へイリウドするからさういうものと、今では解して居る人もあるか知らぬが、其のゴケイリ又はゴキリは男には限らず、主婦の後を継ぐ者も亦ゴキリで、それは必ずしも何処かの寡婦とは限らぬのである。但し初期の再縁はこの中には入らず、既に先妻に子の有る場合にのみさういふかと思はれるが、是はまだ確かでない。女が寡居するものを後家暮しといふことと、関係のあることは察せられるが、後妻をゴケといふ方を誤りだと断定する理由は無いのである。(『族制語彙』P. 181～182)

また、『総合民俗語彙』には次のような記述がある。

後家の字を宛て、未亡人と同じ意味の標準語になっている。『吾妻鏡』などでもすでにこの意味で後家の語を使っているが、各地の用例を見ると意味ははるかに広い。広島県山県郡でゴケは死別した男女、ゴケ同士の縁組みをゴケアツメという。島根県西部でゴケイリは再婚の意味、山口県の柳井にもこの語があり、後添いの妻にも夫々使う。新潟県蒲原地方の用例もこれと一致し、東北地方も広くゴキ、ゴキガカは後妻や継母の意味であり、ゴキテテは後夫や継父にも使われている。山梨県はゴケは出戻り女を意味するが、秋田県では出戻り女も私娼もゴケであり、福島県会津以北にはゴケを酌婦とか私娼の意味に使っている所が多い。

福島北部方言のゴケは、以上全国各地のゴケと、その大綱においては一致するが、細部になると、次に述べるようにいくつかの不一致点がある。

① 標準語の後家は、未亡人の意に限られるが、福島北部方言では妻と死別して、まだ再婚しないでいる夫の意にも使う。この点では広島県の場合と同じ。

② しかし、福島北部方言では死別ばかりでなく、離婚してまだ再婚していな

い男女の意にも使う。これは、標準語とも広島県の場合とも違う。

㊦ 死別も離婚もせず、現に夫婦でありながら、何らかの事情で夫婦が別々に離れて生活しているような場合、この夫婦はそれぞれゴケになる。たとえば夫が戦争で召集されて家に居ない場合、家に残った妻はゴケである。また、夫婦のどちらかが出かせぎに行き、それぞれがしばらくの間独りぐらしをするという場合、夫婦の双方がゴケになる。次は、福島市茂庭で録音した、現地の女子青年と飯豊室長との会話の一節である。

○東京ノホーニ 出カセギニ 行ク 人モ 多インデスカ。

○冬ナイ、男ノ 人。

○冬ナンカ イナクナルナ 男ノ 人。 ウンダカラ ゴケニ ナッチマウ。 女
バツカリ ゴケニ ナッチマウ。(笑) ナンボ 夫婦ダッテ ゴケニ ナンナッ
カ ナンネゾエ。

㊧ 福島北部では、ゴケの意味がさらに広がって、結婚適齢期が過ぎても、まだ結婚しないような男女をさす。次は、福島県保原町の81歳の老婆の会話から。

○アノ男ワ 30 スギテモ マダ ゴケダ。

○アノ人 嫁モ モラーネデ 一生 ゴケデ 通シタ。 一生 オンツァマデ シ
マッタ。 モゴサイ 人ダゴト。

㊨ 対になるものや、合わせて一つの物の、片方だけが残っているものの意味でも使われる。これは標準語の後家と同じ。

○コノ下駄 ゴケダ。

○メオト茶椀ガ ゴケニ ナッタ。

㊩ ゴケが後妻の意味で使われるのは、ゴケイリスル・ゴケニハイルという二つの言い方の場合だけに限られ、そのほかの場合は、すべて前述の㊦～㊨の意味である。もちろんゴケイリスル・ゴケニハイルのゴケの意味は、後妻の意味だけであって、㊦～㊨の意味はない。つまり福島北部方言では、東北の他の地方や全国各地の方言とはちがって、後妻の意味でのゴケは、その用法を極端にせばめ、反対に後妻以外の意味では、標準語の後家と比較して、その用法が㊦～㊨と非常に広がっているのである。

② bとeの系列における単語の対立は、3.1, 3.2の場合と同じ。

3.4 本妻・めかけなど

妻を夫との婚姻関係の法的承認の有無という側面から抽象した意味を表わす単語には、次のようなものがある。

本妻 * 正妻

めかけ てかけ 二号

* 内妻 (* 内縁の妻)

① 東北地方に一般にあるといわれるヲナメ(『族制語彙』)は、この地方にはない。

IV 直系

4.10 親子など

親子という意味は、個人の組合せを生殖行為の主体と客体の組合せという側面から抽象した場合の意味である。ある個人Aとある個人Bが生殖行為の主体と客体という関係で組合さっているとき、わたしたちは、そのABの組合せの全体の中からこの生殖行為の主体という側面を抽象して、これに親という意味を与え、生殖行為の客体という側面を抽象して、これに子・子どもという意味を与える。

この意味を表わす単語には、次のようなものがある。

a 親子 親 子 子ども

b 二親 両親 片親

c フタツゴ みつご よつご ひとつご *ふたご *双生児

① Cの系列は、同じ母親から子どもが一度に二人以上生まれた場合のことをさす単語の系列であるが、これは、標準語とフタツゴ(=ふたご)のところだけが違う。

4.11 *父・*母など

親を性別という観点から抽象すると、次のような単語の系列が浮かびあがってくる。

a1, オトツツァマ——オトツツァン——オトツツァ——チャン

a2, ツァツツァヤマ(タツツァヤマ)——ツァツツァヤン(タツツァヤン)——ツァツツァ(タツツァ)

a3, オッカサマ——オッカサン——オッカヤン——オッカ——ガガ・ガッカ*(注)

a4, ガアサマ——

a5, ガッカヤン・カッカヤン——

*・カッカ

(注) *印は、下の行の左端の *印につながることを示す。

- b₁, { おやじ
 オッカ・ガガ・ガッカ・カッカ *おふくろ
- b₁, { オヤンツァマ
 オッカヤン・ガッカヤン・カッカヤン
- c, { とうちゃん
 かあちゃん
- d, { 男親
 女親
- e, { *父 *父親 *父上 *父君 etc
 *母 *母親 *母上 *母君 etc
- f, { *(お)とうさま *(お)とうさん *おとうちゃん
 *(お)かあさま *(お)かあさん *おかあちゃん
- g, { *パパ
 *ママ
- h, *父母(ふぼ)

① a₂の系列は、福島北部でも伊達郡旧茂庭村や旧白根村など山村地域の方言にみられる系列である。

② a₁の系列のチャンは、以前はよく使用されたが、現在でははえぬきの老人層の間でもあまり使用されていない。

③ a₃の系列のうちガガ・ガッカ・カッカは、妻または主婦を指して使うことのほうが多く、母親の意味ではあまり使わない。ガガ・ガッカ・カッカのうちでは、ガガが一般的。ガッカ・カッカの使用の広がり是非常に狭い。

④ a₅ガッカヤン・カッカヤンは、ガガ・ガッカ・カッカよりはていねいな形。

⑤ b₁で、おやじに対応するのは、オッカかガガ・ガッカ・カッカである。おふくろではない。

⑥ b₂は、b₁よりもくだけた感じをもつが、ていねいな形。

⑦ cのとうちゃん・かあちゃんは、チャン・オッカヤン・オッカ等に代わって、若年・青年層はもちろん老人層の間にまで広がっている新しい形。ただし、おとうちゃん・おかあちゃんとおのついた形はまだ方言の中に入りこんでい

ない。

⑧ $a_1 a_2 a_3 a_4 a_5$ の単語の系列は、それぞれ待遇法上の使い分けによる対立を示すが、福島北部方言の場合、他の地方の村落社会の方言とちがって、社会階層の上下のちがいがこの使い分けを規定する要因としてはそれほど大きくは働いてはいない。

比較のために、ここで他の地方の村落社会の方言の場合についてみると、たとえば、磯田進氏は、戦後間もなく秋田県北秋田郡の村落社会の構造を主として家族制度との関連において分析したが、この地方の方言の親族語彙について次のように述べている。

この地方の村落社会構造を見て顕著に目につく点は、家格(すなわち家の格式)の区別がはっきりしていることである。それは人々のことばづかいそのものの中に明らかにあらわれている。まず、人に対する呼び方が、その人の属する家の家格に応じて種々にちがっている。すなわち、ある家の主人のことを呼ぶのに、第1級の家格の家の主人のことはオトウサンと呼び、第2級の家の主人のことはオトと呼び、第3級はトト、第4級はテテとそれぞれ呼ばれる。主婦のことを呼ぶのも、同様に、家格に応じて4級に区別される。第1級(すなわちオトウサンの妻)はオカアサンであり、第2級(オトの妻)はオカであり、第3級(トトの妻)はカカ、第4級(テテの妻)はアッパである。これは、村民が他の家の主人・主婦を呼ぶのにこのような使いわけをするばかりでなく、子供が自分の父母を呼ぶ場合にも、家格に応じてかように区別された呼び方に従う。だから、第1級の家では子どもは親をオトウサン・オカアサンと呼ぶが、第2級の家ではオト・オカと呼ばねばならぬ等である。都会の小学校でのように、一律に「オトウサン、お早うございます」というようなあいさつを教えたところでは、ここでは通用しない。

同様に、ある家の長男のことを呼ぶ呼び名も家格に応じて区別があり、第1級の家の長男はアンサマ、第2級の家のそれはアンチャ、第3・第4級の家の長男は共通にアニと呼ばれる。次男以下の男の子の呼び方にしても同様で、オンサマ、オンチャ、オジと3段階に区別されている。女の子のこと、年よりのことを呼ぶにも、同様に家格に応じて呼び方の区別がある。老人だから誰でもオジイサン、オバアサンと呼んでいいというわけにはいかないのである。(磯田 進「家族制度と村落社会構造」『季刊大学』第2号)

また、上村幸雄氏の報告によると、石川県鳳至郡野町川西大字田長の方言、および新潟県古志郡上北谷村大字本明の方言の親族語彙には、家格の違いに応じてそれぞれ次のような対立を見せている。(「敬語の歴史的変化についての一考察」『人類科学8』昭和31年)(このうち石川県のは柴田武氏の調査によるものであ

り，新潟県のは上村氏自身の調査によるものである。）

I 石川県鳳至郡野町
川西大字田長の方言

II 新潟県古志郡上北谷村
大字本明の方言

i) 父(家長)

	上上	'ototosama
		'ojaTsama
(家の身分的な格)	上	'ototo
	中	tooto
		toTcama
	下	paTpa cjaacja cjaa

	上	otoTcama
		otoTcaN
(家の身分的な格)	中	ototo
	下	caaca
		caa

ii) 母(家長の妻)

	上上	'okakasama
		'oTkasama
	上	'okaka
	中	kaaka
		diaasama
	下	diaama
		ziaama

	上	oTkasama
		oTkasaN
	中	okaka
	下	kaTka

iii) 祖父(家長の父)

	上上	'oziisama
		'oziisama
	上	'ozizi
	中	ziisama
		zisama
	下	ziizi

	上	ozisama
	中	ozizi
	下	ziizi
		ziija

iv) 祖母(家長の母)

	上上	'obabasama
	上	'obaba
	中	baasama
	下	baaba
		baa

	上	obaasama
	中	obaba
	下	baaba
		baa

v) 嫡子(Iでは15歳くらい以上のみ, IIは幼少もふくむ)

	上上	'oaNsama
--	----	----------

	上	aNsama
--	---	--------

上	'aNsama	中	ansaa
中	'aNsa		aNnjasa
	'aNko	下	aNnja
下	'annja		njaa
	'aNka		

しかし、福島北方言の親族語彙の場合は、このような社会階層の上下による使いわけの規範は非常にゆるい。第1級または上層の家格の家の親だから、その家の者もよその家の者もオトツツァマ・オッカサマと呼び、第4級または最下層の家の親だからチャン・ガガと呼ばねばならないという規範は、非常にばくぜんとした形で存在していることは否定できないにせよ、それが上に引用した秋田県や石川県・新潟県の村落社会の方言の場合のように、きわめて強力な形で存在している(存在していた)とは、決して言えないようである。

上層の家に生まれ、現在まで上層の家の中で生活してきた、生えぬきの老人でさえ、i, 子どもの頃は、自分の親も他人の親もチャン・オッカ・オッカヤンと呼ぶことが最も日常的であった、ii, オトツツァマ・オトツツァン・オッカサマ・オッカサンと呼ぶのは、なんらかの意味で改まったとき、iii, そして、その改まったときには、上層の家の親はもちろん、下層の家の親もそう呼んだと答えている。

昔からの地主で、戦前から戦後まで長年にわたって町会議員を勤めたという人の妻であった、生えぬきの82歳の老婆(当然社会階層では上層の部にはいる)が近所の親しい老婆と茶飲み話をしている。その茶飲み話の中に、次のような一節があった。ここに出てくるアノ人とは、昔からこの家と旦那——小作の関係にある人である。

アノ人ワ 今デモ オラエノ 小作 シテッケンチョモ アノ人ノ オトツツァマ
オジンツァマノ 代カラ オラエノ 小作 シテンダイ。アノ人ノ オッカサマモ オ
カタモ ヨク 手間取りニ キテ オラエデ カセイデタモンダ。今デコソ 少シ ヨ
ク ナッタゲンチョ 昔ワ ヒドイ 暮シデナイ。ヨク オラエノ オトツツァマ (=
亡夫)ダノ オジンツァマニ ナンダ カンダッテ 面倒 ミテ モラッテナイ。

4.12 むすこ・むすめなど

子どもを性別という側面から抽象した意味を表わす単語には、次のようなもの

がある。

むすこ せがれ *坊ちゃん *子息 *令息
むすめ *お嬢さん *息女 *令嬢

4.13 *長子・*末子など

子どもの組合せを出生順という側面から抽象すると、次のような単語の系列が浮かびあがってくる。

- a 総領・家督・跡とり・跡つぎ・ムコトリムスメ・*よつぎ——ニバンコ——サンバンコ——ヨ(ン)バンコ……パッチ・パッチコ・スグッタレ・ツルタグリ・ネコノシッポ
- b 総領・家督・跡とり・跡つぎ・(ムコトリムスメ)——オンツァマ・オンツァ・オバサマ・オバ
- c *長子・*第1子——*次子・*第2子——*第3子……*末子・*すえこ・*すえっこ

① bの系列は、本来子どもの組合せを家の相続という側面から抽象したときに生まれる単語の系列である。総領・家督・跡とり・跡つぎ・ムコトリムスメは、家を相続する子ども、そしてオンツァマ・オンツァ・オバサマ・オバは、それ以外の子どもの意である。それが長子と第2子以下という単なる子どもの組合せ×出生順の意味にも広がって使用されるようになったのは、長子相続をとってきた日本の伝統的な家族制度の反映にほかならない。これは、aの系列で、第2・第3子……を意味するニバンコ・サンバンコ……に対して、第1子を意味する総領・家督・跡とり・ムコトリムスメ・*よつぎの場合も同様である。

したがって、次のような表現が意味的には少しもおかしくない。

- a アノ家デワ 家督ガ 家督ニ ナンナイデ、ニバンコ(オンツァマ)ガ 家督ニ ナッタ。
- b アノ家デワ 総領ガ 総領ニ ナンナイデ、ニバンコ(オンツァマ)ガ 総領ニ ナッタ。
- c アノ家デワ 跡トリガ 跡トリニ ナンナイデ ニバンコ(オンツァマ)ガ 跡トリニ ナッタ。
- d アノ家デワ ムコトリムスメガ ムコトリニ ナンナイデ オバサマガ ムコトリニ ナッタ。

ただし、子どもが男だけ(・女だけ)の組合せか、それとも男女混合の組合せであるかの違いによって、家督と総領には次のような使いわけがある。

男だけ	長男	家督(一むすこ)・総領(一むすこ)				
女だけ	長女	家督(一むすめ)・総領(一むすめ) ^(注)				
男女混合で、長子が	男	<table> <tr> <td>長男</td> <td>家督(一むすこ)・総領むすこ</td> </tr> <tr> <td>長女</td> <td>総領むすめ</td> </tr> </table>	長男	家督(一むすこ)・総領むすこ	長女	総領むすめ
長男	家督(一むすこ)・総領むすこ					
長女	総領むすめ					
同上で、長子が	女	<table> <tr> <td>長男</td> <td>家督(一むすこ)・総領むすこ</td> </tr> <tr> <td>長女</td> <td>総領むすめ</td> </tr> </table>	長男	家督(一むすこ)・総領むすこ	長女	総領むすめ
長男	家督(一むすこ)・総領むすこ					
長女	総領むすめ					

(注) 家督(一むすこ)・総領(一むすこ)の カッコ内の一は、それぞれ家督・総領の省略。以下同じ。

つまり、男女混合の場合長男という意味で総領むすこ・家督・家督むすことは言えても、長女という意味で家督・家督むすめとは言えない。総領むすめとしか言えない。

家督も総領も、子どもの組合せ×家の相続の意味から子どもの組合せ×出生順の意味へ移行してきたものであるが、その移行の程度は、この例によっても明らかのように総領のほうが強く、家督のほうが弱い。これは、家督のほうが明治以降太平洋戦争直後までの日本の家族制度を支えてきた旧家族法により強く密着した単語であったことの反映であると考えられる。

③ aの系列が使えるのは、たとえば、一郎——二郎——三郎——四郎、または春子——夏子——秋子——冬子のように、子どもが男ばかり、女ばかりの場合に限られ、男女混合の場合には使えない(4.14を参照)。ただし、末子を意味するバッチ・バッチコ・スグッターレ等は例外である。この意味で、子どもの組合せを出生順からだけ抽象した単語の系列は、福島北部方言にもじゅうぶんな形では整っていないと言することができる。

③ ニバンコ—サンバンコ……に対して、イチバンコがあってもいいはずだが、これは総領その他の単語にとって代わられている。

④ スグッターレ・ツルタグリ・ネコノシッポは、多分にふざけたニュアンスをもっているが、同時に伝統的な家族制度の下での末子の地位の低さを端的に表わしている。

果樹がたくさん実をつけたとき、品質のよい大きな果実を結実させるためには、それらがまだ小さいうちに貧弱で形の悪いものをえりぬいて捨て、よりよいものだけを残さねばならない。福島北部方言ではこのことを、たとえばリンゴを

スグルと言い、そのスグラレテ捨てられるもの、いわばくずの部分のスグッタレと言う。ツルタグリのかぼちゃ・西瓜などは、もとなりのそれに比べれば、形は貧弱だし、味もまずい。ネズミをとるのに、ネコノシippoはあってもなくてもいいというわけである。

4.14 長男・長女など

子どもの組合せを性別×出生順の観点から抽象した意味を表わす単語には、次の系列の単語がある。

- a. { 長男——次男——三男——四男……………
 長女——次女——三女——四女……………
- b. { 総領むすこ・ソーリョーヤロ・家督むすこ・カトクヤロ・跡とりむすこ・アトトリヤロ・跡つぎむすこ・アトツギヤロ・イハイモチ——ニバン(コ)ムスコ・ニバン(コ)ヤロ——サンバン(コ)ムスコ・サンバン(コ)ヤロ……バッチムスコ・バッチ(コ)ヤロ・* 末むすこ
 総領むすめ(家督むすめ・跡とりむすめ・跡つぎむすめ・ムコトリムスメ)——ニバン(コ)ムスメ——サンバン(コ)ムスメ……バッチムスメ・* 末むすめ
- c. 総領・家督・跡とり・跡つぎ・ムコトリ・* よつぎ——オンツァマ・オンツァ・オバサマ・オバ

①. aとbでは、bのほうが多く使用される。「……むすこ」と「……ヤロ」では、「……ヤロ」がぞんざいなニュアンスをもつ。福島北部方言のヤロは、標準語の野郎とは違って、それのもつニュアンスがそんなにきびしくない。

②. 子どもがむすめばかりの場合は、長女は総領むすめというほかに、家督むすめ・跡とりむすめ・跡つぎむすめ・ムコトリムスメとも言う。

③. cの系列については、4.13の①を見よ。

④. 長男のことをイハイモチというのは、親の葬式における長男の役割分担の慣行からでてきたものである。

4.15 家督・総領・オンツァマなど

子どもの組合せを家を相続するものとしめないものという側面から抽象すると、次の単語の系列が出てくる。

総領・家督・跡とり・跡つぎ・ムコトリ・* よつぎ——オンツァマ・オンツァ・オバサマ・オバ

①. ムコトリは、子どもの組合せが女ばかりの場合の相続人。ムコトリムスメ

とも言う。

アソコノ 家デワ ニバンコムスメガ ムコトリニ ナッタ。

② オンツァマ・オンツァ・オバサマ・オバは、洗いあげると、次の九つの意味をもつ。

㉑ 家の相続人である長男長女以外の子ども。二男二女以下。これは、幼少の場合も含み、既婚・未婚を問わない。たとえば、親が小学生くらいの子どもの向かって、次のように言う。

オメーワ オンツァマダカラ 家サ 居ランニ。ドコサデモ 行カニャ、ナンネ。

㉒ 同上であるが、ただし幼少の場合は含まず、既婚・未婚は問わない。

㉓ 適齢期を迎えても、または適齢期が過ぎても、未婚で他出しない二男二女以下。

㉔ 適齢期を迎えても、または過ぎても、未婚でいる男女。ゴケと同義である(3.31の①参照)。たとえば、次のように使う。

アノ人ワ 嫁 モラーネデ 一生 オンツァマデ 通シタ。

アノ人ワ 嫁ニ 行ガネデ 一生 オバサマデ 通シタ。

㉕ 知能の程度が一人前以下である、または仕事をさせても、一人前以下の仕事しかしないような男女。次のように使う。

アノ男ワ 何 サセテモ 駄目ナ 奴ダ。オンツァマダ。

アノ娘ワ 何 サセテモ 駄目ナ オナゴダ。オバサマダ。

オンツァマ(オバサマ)バックリ アズバッテ、ナニ ソダゴト デキル。

コノオンツァマヤロー ナニ ヤッテンダ。

㉖ 知能の程度が一人前以下である状態。または仕事をさせても、その仕事のできばえが一人前以下であるような状態。(形容動詞)

アノ人ワ 頭ノホーワ ナンボ オンツァマ(オバサマ)デモ、ウント 稼イダカン
ナイ。ホダカラ アノ程 シンシヨ、ノコシタ。

ナニ サセテモ オンツァマナ 仕事バリ シテル。(この場合は、オンツァマしか使えないようである。)

㉗ 機械・道具などが故障などによって本来の機能を十分に発揮することができなくなったような状態。(形容動詞)ただし、この意味で使用されるのはオンツァマだけ。

コノ水道ノ 蛇口 オンツァマニ ナッタ。

モーターガ オンツァマナ モンダカラ 扇風機 ウマク マワンネ。

㊸ 親の兄弟姉妹をさす。標準語のおじ・おばに対応する。これにはオンツァン・オバヤンも使用される。これは、次の㊸の場合も同じ。

㊸ 年配の男または女をさす。標準語のおじさん・おばさんに対応する。

以上のうち、㊸㊸㊸は、二男二女以下の子どもという点では共通だが、bはそのほかに年齢という条件が加わり、cはその上にさらに婚姻という条件が加わる。㊸㊸㊸のうちどれが優勢であるかは、はえぬきの老人層を対象に相当の量的調査をしてみないとわからない。はえぬきの老人層の間でも、㊸の意味で使うという人は㊸㊸を否定し、㊸を肯定する人は㊸㊸を否定する。㊸を肯定する人は㊸㊸を否定する。という具合に、かなりその意味用法が人によってまちまちである。ただはっきり言えることは、㊸㊸㊸ともに、㊸㊸㊸㊸㊸㊸㊸、とりわけ㊸㊸に比べれば、現在ではその使用の層の広がりがある老人層の間でも非常に狭いということである。㊸㊸㊸いずれかの意味で使うと答える人よりも、㊸㊸㊸のいずれも使用しない、親族語としては㊸の意味でしか使用しないと答える人のほうが非常に多い。

㊸ ㊸以下の意味のうち、㊸㊸㊸は伝統的な日本の家族制度の下での相続人対非相続人、つまり長男長女対二男二女以下のある側面を抽象したものであり、㊸はそれから更に発展したものと考えることができる。

日本の家族制度の下では、「長子(長男か長女)は本家の跡をつぐもの、次子以下(二男二女以下)は本家のために働くもの」という根強い長子優先、裏を返せば次子以下の蔑視(家の関係でいえば、本家優先、分家蔑視)の観念がある。これが第1に長子と次子以下のそれぞれの結婚年齢の差異となって現われる。長子は、よつぎを早くもうけることと、嫁または婿という新しい労働力を得ることの二重の目的で、次子以下の者よりも年齢的に早く結婚させる必要がある。次子以下にはその必要がない。次子以下に早く嫁(婿)を迎えては、家族内の人間関係をまとめて行く上でとかく問題が起りかねないし、財産分与や分家のことで親は頭を悩まさねばならなくなる。それよりは、未婚のまままでせいぜい家のために働いてもらっていたほうがよい。結婚や財産分与・分家はそれから先のことにしたほうが

得策だ。いや、それらは未婚のまま家でために精一杯働いてもらうためのえさに利用したほうがよいというわけである。上にあげた㉔の意味は、次子以下のこういう側面を抽象したものであり、㉕の意味は㉔の意味から次子以下という本来最も基本的なものであるべき部分を捨象して、未婚という面だけを広げていったものである。

長子に対比して、次子以下が上のような差別的扱いを受けているとすれば、当然次子以下は、長子や親に比してその仕事に身がはいらなくなるだろう。時には故意にさぼるかも知れない。わざと一人前以下の仕事をしてお茶をにごすことも覚えるだろう。そういう事が重なれば、親の目からすると、オンツァマ・オバサマは駄目な奴だ、頼りにならない奴だ、バカな奴だということになるだろう。オンツァマ仕事・オバサマ仕事は一人前以下だという親の主観的評価は、やがて村落社会全体に通ずる客観的な評価に移っていくだろう。

㉔の意味は、オンツァマ・オバサマのこういう側面だけを抽象し、㉕と同じように、次子以下という最も基本的な部分を捨象したものである。㉖の意味は、さらにそれが発展して人間の性質状態を表わす形容動詞となり、㉗の意味は、それからさらに進んで、物の状態に関する形容動詞になったものである。

福島北部方言には、標準語の叱られるにあたる受身の動詞にオンツァエル、またはオンツァレルというのがあるが、これもあるいは上のオンツァマ・オンツァから派生したものかも知れない。なぜなら、「コノオンツァ(オンツァマ)」と言って叱られることが、とりもなおさずオンツァエル・オンツァレルなのであるから。

授業中ニ ワリコト シテ 先生ニ ウント オンツァッチャ。

人カラ オンツァエルヨーナコト シテワ ナンネゾ。

福島北部方言では、また、山猿のことをヤマノオンツァマと言うが、このオンツァマも上にのべたオンツァマと関係があるのだろう。つまり、家督に対するオンツァマの以上にのべた側面の抽象と関係があるのであって、㉘㉙の意味のオンツァマ(標準語のおじさん)に関係があるのではないのかも知れない。猿のすることが利口なようであって、利口でない。一人前のことをしているようで、実は一人前のことをしていない。そこに家督に対するオンツァマと共通する所があると

いうのだろう。

4.16 *嫡子・*庶子など

子どもをその母親が正妻かめかけかいう観点から抽象すると、次のような単語が出てくる。

*嫡子 *嫡出子 *嫡出 *嫡男 *嫡女

*庶子 *庶出 *妾腹

福島北部方言の語彙体系には、このカテゴリーに属する単語を欠く。本妻の子——めかけの子などというように単語を組み合わせて表わす。

4.17 ててなしご・*私生児など

子どもをその親が夫婦かどうかという観点から抽象すると、次の単語がでてくる。

ててなしご ホマチコ *私生児

ホマチコのホマチは、へそくりがねのような、家の特定の成員にだけ属する財産のこと。たとえば嫁が賃仕事をして得た金を家に入れないで、自分の小遣いにするような場合は、嫁のホマチガネであり、田があって、そこからの収穫が家全体のものにならず、年寄り夫婦だけのふところにはいりこんでしまうことになっている場合、その田は年寄り夫婦のホマチダ・ホマチタンポと言う。

4.18 嫁・しゅうとなど

親子の組合せを子どもの婚姻関係×性別の側面から抽象すると、次の単語が浮かび上がってくる。

(子) 嫁 ヨメコ ヨメサマ *(お)嫁さん *花嫁

婿 ムコサマ *(お)婿さん *花婿

(親) しゅうと しゅうとめ しゅうとおや

a1 シュートオッカサマ——シュートオッカサン——シュートオッカヤン——*

a2 シュートガアサマ——

a3 シュートガッカヤン・シュートカッカヤン——**

*——シュートオッカ——シュートガガ・シュートガッカ・シュートカッカ

**——

a4 シュートオトツアマ——シュートオトツアサン——シュートオトツア

a5 シュートオヤツアマ——シュートオヤジ

① 嫁は、婿に対して嫁であると同時に、しゅうとに対しても嫁である。婿も

嫁に対して婿であると同時に、しゅうとに対しても婿である。

次は、昨年夏伊達郡旧茂庭村で録音した三人の老婆の会話の一節である。83歳の老婆がむすこ(または孫か)の嫁をオラの嫁と言っている。つまりむすこ(または孫の)の嫁は、しゅうとめに(または、しゅうとめとしゅうとの双方をひくくするめたもの)にとっても嫁なのである。(注)

B (78歳) ホダ話ワ 春 聞イタツタゲンチョモナ。

C (73歳) 馬鹿ン ナッタツツタナ。

A (83歳) ……サ 行ッタトキ ナントカ ズッタラバ オラノ ヨメ ナン
ツッタッタベ。ロクデナシダトカ……

②. ついでに言えば、嫁は主婦に対しても嫁である。つまり主婦である妻に対して、主婦でない妻が嫁である(2・3の④を参照)。

(注) オラノ ヨメのオラは単数とも複数ともとれる。単数ならもちろんしゅうとめ、複数ならばしゅうとめとしゅうとの二人を指すものと解すべきだ。家族全体をさすと考えたらかおかしい。なぜなら1家族の中でオラノ ヨメと言えるのは、婿としゅうと・しゅうとめに限られ、それ以外の家族成員はオラエノ ヨメと言うのが普通であるからである。もちろんオラエノ ヨメは、しゅうと・しゅうとめが言ってもおかしくない。

② 親子の組合せを婚姻関係の観点から抽象した際の親の意味を表わす単語には、しゅうと・しゅうとおやの二つがある。しかし、これに対して、婚姻関係の観点から抽象した子どもの意味を表わす単語は、標準語にも福島北部方言にもない。あるのは、嫁・婿のような性別の観点も同時に入れた単語だけである。

4.18 兄嫁・弟嫁など

嫁・婿を配偶者のきょうだい関係その他からみると、次のような単語がある。

セナヨメ シャデヨメ 兄嫁 弟嫁 姉むこ 妹むこ
家督よめ 総領よめ 跡とり嫁 まごよめ

4.19 ままおや・ままこなど

親子の組合せをその片親との血縁関係の有無という側面から抽象すると、次の単語がでてくる。

ままおや ままこ

ママオッカサマ——ママオッカサン——ママオッカヤン——ママオッカ——ママガガ

*ままはは *継母

ママオドツツァマ——ママオトツツァン——ママオトツツァ ママオヤジ *ままち
ち *継父

4.20 つれこ

女(・男)が再婚するときにつれて行く、前の夫(・妻)との間にできた子どもという意味を表わす単語は、つれこの一語しかない。福島北部方言では、これが動詞にもなる。「アソコノ エーサ 今度 来タ 嫁 ワラシ 二人モ ツレコシテ キタド」

4.21 養子・モライコなど

親子の組合せを養子縁組みという側面から抽象すると、次の単語がでてくる。

養父 養母 養父母
養子 養女 モライコ 順養子

- ①. 養子・養女は、年齢に関係なく使えるが、モライコは、主に子どもを養子にする場合にだけ使う。なおモライコは、次のように動詞としても使う。

アノ夫婦 コモタズ(=子をもたないこと)ナモンダカラ 本家ノ 娘 モライコシテ ソダテタ。

4.22 *義父 *義子など

親子の組合せを義理関係という観点から抽象すると、次の単語がでてくる。

*義父 *義母 *義父母 *義子

福島北部方言ではこれに該当する単語を欠き、ギリノ～という形で表わす。

4.30 親の親

標準語・福島北部方言ともに、この意味を表わす単語を欠く。

4.31 *祖父・*祖母など

親の親を性別という観点から抽象した単語には、次のような系列がある。

{(オ)ジンツァマ——(オ)ジンツァン——ジッチ
オバンチャマ——オバンチャン——バツパ
ジッチサマ——ジッチヤン——ジッチ
バツパサマ——バツパヤン——バツパ
ジューチャン {ジジチャン {じいさま——じいさん——じい
バーチャン {ババチャン {ばあさま——ばあさん——ばばあ
*おじいさま——*おじいさん——*じじ・じじい
*おばあさま——*おばあさん——*ばば・ばばあ

{*祖父 *祖父母
*祖母

以上の単語の使いわけに社会階層の上下の違いということがそれほど大きな要因として働かないことは、4.11 父母の場合などと同じである。

4.40 親の親の親

この意味を表わす単語は、標準語にも方言にも欠けている。

4.41 *曾祖父・*曾祖母など

親の親の親を性別の観点から抽象して表わす単語は、福島北部方言では祖父・祖母を表わす単語の頭にヒまたはヒーがつく。語形をあげるのは省略。4.30を参照。ここには標準語だけをあげる。

*曾祖父 *曾祖母 *曾祖父母
*ひ(い)(お)じいさん *ひ(い)(お)ばあさん

福島北部方言では、また、曾祖父母を祖父母と対比させて、次のように言うことが多い。

曾祖父 デッカイ(・オッキ・ズナイ)+祖父母を表わす単語
 トショリ+同上
祖 父 母 チャッコイ(・チチャコイ・テッチャイ etc)+同上
 ワカイ(・ワカ)+同上

4.50 ま ご

子の子を表わす単語は、標準語にも福島北部方言にも次の一語しかない。

まご

4.51 *孫むすこ・*孫むすめなど

孫を性別という観点から抽象して表わす単語は、次のとおり。

*孫むすこ オトコマゴ
*孫むすめ オナゴマゴ オンナマゴ

オナゴマゴとオンナマゴとでは、オナゴマゴのほうが普通。

4.52内孫・外孫・初孫など

孫を表わす単語には、ほかに内孫・外孫・初孫・*ういまごなどがある。

4.60 ひまご・曾孫など

子の子の子つまりまごの子を表わす単語には次のようなものがある。ただし、これを性別の観点を入れて表わす単語はない。

ヒコ *ひまご *ひいまご *曾孫

4.70 やしゃご・*玄孫など

子の子の子の子つまりひまごの子を表わす単語は次のとおりである。これも性別を入れて表わす単語はない。

やしゃご *玄孫 ヤサエゴ ヤセーゴ ヤジャラゴ

4.80 ゾンゾリゴなど

子の子の子の子の子つまりやしゃごの子を表わす単語は、標準語にはないが、福島北部方言にはある。

ゾンゾリゴ ズンズラゴ ズンズリゴ ジャンジャラゴ

福島北部では、「ゾンゾリゴノ 顔 見ッ ト 鬼ニ ナル」という。つまり年寄りもそれほど長生きすると、あとがつかえて周囲からもてあまされる・けむたがられるということなのだろう。

V 傍系

5.10 きょうだい

きょうだいという意味は、個人の組合せを親が同じかどうかという側面から抽象した場合に生まれる意味である。これには日常よく使われる単語としては、標準語・福島北部方言ともにきょうだいの一語しかない。

きょうだい *同胞 *はらから

5.11 おとこきょうだい・おんなきょうだい

きょうだいを性別という側面から抽象すると、次の単語がでてくる。

おとこきょうだい おんなきょうだい おなごきょうだい

*兄弟 *姉妹

5.12 *兄・*弟など

きょうだいを性別×その本人を基準とした出生の先後の側面から抽象すると、兄・弟・姉・妹の意味が生まれる。それぞれの意味には、次のような単語の系列がある。

a 兄

セナサマ——セナサン——セナ

デデー・デデッコ・デッコ

アンチャマ——あんちゃん——アンチャ

（お）兄さま——（お）兄さん——*兄
*兄上様——*兄上——*兄
*兄貴——*兄

b 弟

シャデサマ——シャデサン——シャデ
おとうと

c 姉

アネサマ——アネサン・アネチャン・アネヤン——あね・アンネ
ねえさん・ねえちゃん
*（お）ねえさま——*おねえさん・*おねえちゃん
*姉上様——*姉上——姉

d 妹

いもうと

- ① 全国方言辞典には、おじ・おば・せなについて次のような記述がある。
おじ → おばの弟。次男以下。庄内(浜荻)・東北地方・長野・岐阜・北陸・滋賀県高島郡・三重県志摩郡・奈良県吉野郡・隠岐
おば → おじの妹・次女以下。庄内(浜荻)・山形県庄内地方・福島・新潟・茨城・千葉・長野・美濃・能登・隠岐
せな → ①兄。長男。東国(物類称呼)・常陸(常陸方言)・武蔵目黒青梅辺(御国通辞)・岩手・秋田・山形・福島・栃木・群馬・埼玉・茨城県南部・千葉・神奈川・山梨

これによると、福島でもセナは兄の意味のほかに長男の意味があり、オバは次女以下の意味のほかに妹の意味があることになっている。しかし、少なくとも福島北部方言に関する限り、セナには長男の意味がないし、オバには妹の意味はないはずだ。はえぬきの老人層でこのような意味のあることを肯定した人はひとりもいなかった。

また、オジは東北地方にあることになっているが、福島県北部方言にはこのオジという語形そのものがないし、これと意味的に対応する異なった語形であるオンツァマにも、次男以下の意味はあるが、弟の意味はない。

② デデー・デデッコ・デッコは、伊達郡旧茂庭村・旧白根村・旧富成(とみなり)村など山間部の村落で多く使用されていたらしい。これら山間部の村落の

老人は、子どもの頃使ったが、現在は自分たちでも使っていないと答えている。

③ セナサマ・アンチャマ・アンチャン・アンチャ・アネサマ・シャデ・イモウト等は、兄弟姉妹の関係をぬきにして、単に年齢の多少を比較するのにも使う。仮にAが20歳、Bが17歳とすると、次のように言う。

Aワ Bヨリモ 三ツ アンチャマ(・セナサマ・アンチャン・アネサマ etc)ダ。

Bワ Aヨリモ 三ツ シャデ(・イモウト etc)ダ。

5.13 *長兄・*末弟など

きょうだいを性別×その本人を基準とした出生順別、つまり兄・姉・弟・妹のそれぞれを出生順別に表わす単語には次のような系列がある。

*長兄 *次兄 *末弟 *長姉 *末妹

a {
オーセナーニバンセナーサンバンセナ……………
オーアネーニバンアネーサンバンアネ……………

b {
イチバンシャデーニバンシャデーサンバンシャデー……………バッチシャデ
イチバンイモートーニバンイモートーサンバンイモート……………バッチイモート

aは、兄・姉を長兄・長姉から出生順にとらえた系列であり、bは、弟・妹をすぐ下の弟・妹から出生順にとらえた系列である。しかし、これらの単語の系列は、現在ではその使用の広がり狭いようだ。

5.14 ままきょうだいなど

きょうだいの組合せを片親との血縁関係との有無という観点から抽象すると、次の単語がでてくる。

a ままきょうだい

b {
*異母兄 *異母弟 *異母姉 *異母妹
*異父兄 *異父弟 *異父姉 *異父妹

aは、血縁関係のない片親が父であるか母であるかを問わないものであり、bは、それを問題にしている。福島北部方言には、このbの系列にあたる単語がない。福島北部方言では標準語の場合と同じく、「はらちがいの～」 「たねちがいの～」という組合せで表現する。

5.15 *義兄・*義弟など

きょうだいの組合せを義理関係の側面から抽象すると、次の単語がでてくる。

{
*義兄 *義弟
*義姉 *義妹

福島北部方言ではこの意味を表わす単語を欠く。これは標準語と同じく、「義理の～」という単語の組合せで表現する。

5.16 きょうだい×出生順

きょうだいの組合せを性別の観点を入れず、出生順だけで抽象した意味を表わす単語の系列は、標準語にも福島北部方言にもない。

5.17 きょうだい×家の相続

子どもの組合せを家の相続という観点から抽象した単語の系列はあるが、きょうだいを家の相続という観点から抽象した単語の系列は、標準語にも福島北部方言にもない。しかし、方言の中には、この単語の系列をもったものもある。たとえば新潟県小千谷方言では、次の単語の対立がある。(加藤正信氏の教示による。)

アンサマーアンニャサーアンニャ ←→ オジ・オバ

アネサマーアネサーアネ ←→ オバ

つまり家を相続する長兄がアンサマ・アンニャサ・アンニャであり、それ以外のきょうだいはオジ・オバである。また、きょうだいが女ばかりの場合、家を相続するのは当然長姉であるが、その長姉がアネサマ・アネサ・アネであり、それ以外のきょうだいはオバである。この場合アンサマーアンニャサーアンニャ・アネサマーアネサーアネの対立は、それぞれ家格の違いによる使いわけの対立である。

このきょうだい×家の相続の意味を抽象した単語の系列をもつ方言ともたない方言とが、全国的にどのように分布し、その分布が、それぞれの方言社会の親族構造とどのような関係にあるか(あったか)の調査も、わたしの今後における課題の一つになってくるだろう。

5.20 親のきょうだい

標準語・福島北部方言ともに性別を入れずに親のきょうだいの意味を表わす単語はない。

5.21 *おじ・*おばなど

親のきょうだいと性別を組合せて抽象した単語には、次の系列がある。

*おじ *おば *おじさん *おばさん *おじちゃん *おばちゃん etc

{ オンツァマーオンツァナーオンツァ

{ オバサマーオバヤナーオバ

5.30 *おおおじ・*おおおば

親の親のきょうだいという意味を性別に入れて表わす単語は、標準語にはあるが、福島北部方言にはない。

*おおおじ *おおおば

福島北部方言ではたとえば次のようにして表わす。

オトツツァマ(オッカサマ)ノ オンツァマ(オバサマ)

オゾンツァマ(オバンチャマ)ノ アンチャマ(アネサマ etc)

なお、親の親のきょうだいを性別を入れないで表わす単語は、親のきょうだいの場合と同じく、標準語にもない。

5.40 *おい・*めいなど

きょうだいの子という意味を表わす単語は標準語にも福島北部方言にもない。あるのは、次のとおりこれにさらに性別の意味も入れた単語だけである。

*おい *めい

オイコ メイコ

5.50 いとこ

親のきょうだいの子という意味を表わす単語は、標準語にも福島北部方言にも次の1語があるだけである。

いとこ

埼玉県の一部では母方のいとこを麦のイトコ、父方のいとこを米のイトコと区別して呼ぶそうである(『族制語彙』p.76)が、これに類した呼び方は、標準語にも福島北部方言にもない。

親のきょうだいの子を性別に表わす単語として、広辞苑には男のいとこをいとこと言い、女のいとこをいとこめと言うとあるが、これは少なくとも現代標準語の話しことばの語彙だとは言えないだろう。

5.60 またいとこ・はとこなど

いとこの子同士の関係という意味を表わす単語は、次のとおり。

はとこ またいとこ *ふたいとこ *いやいとこ

このうちいやいとこは、少なくとも現代標準語の話しことばにはないと言っていいだろう。

5.70 *みいとこ

いとこの子の子、つまりはとこ・またいとこの子同士の関係を表わす単語は、次のとおり。

そのまたいとこ *みいとこ

福島北部方言では、いとこのことを別にカケムカイノイトコとも言う。また、またいとこ・はとこのことをヒトマワリ マワッタ イトコともいい、そのまたいとこのことをフタマワリ マワッタ イトコとも言う。さらにお互いの関係がたどれないほどあいまいになると、マワリ マワッタ イトコという。カケムカイノ イトコに対して、それ以下の者をひっくるめて、マワッタ イトコともいう。

以上のものを性別に表わす単語は、いとこの場合と同様標準語にも福島北部方言にもない。

5.80 *いとこおじ・*いとこおばなど

父母のいとこである男(・女)を表わす単語として、標準語には次の二つがある。しかし、福島北部方言にはこれを表わす単語はない。(注4)

*いとこおじ *いとこおば

5.90 *いとこおおじ・いとこおおばなど

祖父母のいとこである男(・女)を表わす単語として、標準語には次の二つがある。しかし、福島北部方言にはこれらを表わす単語はない。(注5)

*いとこおおじ *いとこおおば

5.91 *いとこはん・*ちんばいとこ

いとことまたいとこの関係を表わす単語として、標準語には次の三つがある。しかし、福島北部方言にはこれに対応する単語がない。(注6)

*いとこはん *ちんばいとこ *いとこちがい

Ⅵ(付) 年齢階梯

6.1 年齢階梯

心理学は、人間の成長の段階を次のように分ける。

- a 乳児期(出生から生後1年か1年半ごろまで。)
- b 幼児期(乳児期後から満6歳ごろまで。)
- c 児童期(幼児期後から満13, 4歳ごろまで。)

d 青年期(児童期後から満24, 5歳ごろまで。このうち中学生時代を前期, 高校生時代を中期, 大学生時代を後期に分ける)

青年期以後は, 次の二つに分けられるだろう。

e 壮年期

f 老年期

福島北方言と標準語の年齢階梯語彙をこれに割当てると, 次表のようになる。

乳 児 期	ヤヤ・ヤヤコ・オドッコ・オットコ・オド・オボコ・オンボコ *赤ちゃん・*赤ん坊・*赤子・*乳児・*ちのみご・ *嬰兒・*みどりご	ワラシ・ワラシコ こども 未成年
幼 児 期	ミツコワラシ・ワラシ・ワラシコ・ガキ・ガキコ・こども	
見 童 期	*幼児 *幼年 *小児 *おさなご *児童 *少年 *わらべ	
青年期	前期 中期 後期	
	ワケーテ・青年・若造・*若者・*若衆・*若人・*若手	おとな *成 年
壮 年 期	おとな *壮年 *壮者 *中年	*成 人
老 年 期	トショリ・年寄り・おいぼれ・*老人 *初老 *中老 *老年 *故老	

① ヤヤ・ヤヤコ・オド・オドッコ・オットコ・オボコ・オンボコは, ともに赤ちゃん・赤ん坊を意味する俚言。意味用法の上ではほとんど違いはない。ただし, オボコ・オンボコは形容動詞にもなり, 人間の体・心・振舞いなどが未熟で, 子どもじみているさまを表わすのにも使う。反対語はオトナナ。次のように使う。

大学生ニ ナッタツツーノニ オボコナコトバリ 語ッテル。

小学一年生ナノニ ナンダッテ オトナナ ワラシダコト。

② ミツコワラシ 幼児期にある子どもをさす。幼児・おさなご等に対応する。

③ ワラシ・ワラシコ 児童期から青年前期(中学生)ぐらいまでの時期にある子どもをさす。児童・少年などと対応する。

④ ガキ・ガキコ 幼児期から児童期ぐらいまでの時期にある子どもをさす。

⑤ ワケーテ 青年中期から後期ぐらいまでの時期にある人をさす。単数・複数を問わない。青年・若者・若衆・若人等に対応する。

⑥ おとな 標準語のおとなとちがって、形容動詞としても用いられる。①を見よ。おとなは、成人・成年の同義語としての意味のほかに、壮年の同義語、つまり老年と青年の間にある時期をさすこともある。

⑦ トシヨリ 年寄りの詠語。

⑧ 以上のほかに、銭湯などでは小人——中人——大人の三つの階梯を設けて、料金に差をつけている。乳児・幼児期が小人，児童期が中人，青年期以上が大人。

⑨ 病院・産院・保健所などでは、乳児・幼児を新生児——1歳児——2歳児～というふうに階梯を設けている。

6.2 年齢階梯×性別

年齢階梯を性別に抽象すると、それぞれ次のような4段階の単語群が現われる。

	女	男
幼児期・児童期 青年前期	ガキ・ガキコ・メロ・メロコ・ オナゴワラシ・*幼女 *少女 *お嬢さん *女子	ヤロ・ヤロコ・オトコワラシ *坊や *坊ちゃん *少年 *男子
青年中・後期	アネサマ・アネチャン・アネヤ ン・ねえちゃん *おねえさん むすめ *おとめ	アンチャマ・アンチャン・アン チャ *(お)兄さん
壮年期	オバヤン *年増 オッカサマ・ オッカサン・オッカヤン・オッ カ・ガガ・ガッカヤン	オンツァマ・オンツァン・オン ツァ・オトツァマ・オトツ ァン・オトツァ・チャン
老年期	オバンチャマ・オバンチャン・ バッパ・バツパサマ・バツパヤ ン・バーチャン・ババチャン ばばあ・ばあさま *おばあさ ま *おばあさん *おばあちゃ ん *老女・オナゴトシヨリ・ トシヨリオナゴ	(オ)ジンツァマ・(オ)ジンツァ ン・ジツチサマ・ジツチャン・ ジツチ・ジジチャン・ジーチャ ン じいさま・じいさん・じい *おじいさま *おじいさん・ *おじいちゃん・老人・オトコ トシヨリ・トシヨリオトコ

① 乳児期の子どもを性別に表わす単語は、標準語にも福島北部方言にもない。

② ガキ・ガキコ・メロ・メロコ・オナゴワラシ・ヤロ・ヤロコ・オトコワラシは、それぞれ幼児期から児童・青年前期ぐらいまでの時期の男女のこどもをさす。メロ・メロコは、ガキ・ガキコよりも古く、使用の広がり狭くなりつつある。

③ アネサマ・アネチャン・アネヤン・ねえちゃん・ねえさん・アンチャマ・アンチャン・アンチャ・*兄さん、いずれも兄・姉の意味の親族語が年齢階梯語に移ってきたもの。青年中期から後期ぐらいまでの男女をさす。

④ むすめ 女である子どもの意味の親族語から移行して、青年中後期の、未婚の女性をさす。

⑤ オンツァマ・オンツァン・オンツァ・オバヤン・*おばさん・*おじさんともに親族語から移行して、壮年期の男女、または青年期でも既婚の男女をさす。

⑥ オトツァマ・オトツァン・オッカサマ・オッカ・とうちゃん・かあちゃん等、表に示した父・母を意味する一連の単語は、年齢階梯語に移行して、壮年期の男女をさす。

ドコカノ 知ラネ オトツァ(オッカサマ)ニ 役場サ 行グ 道 聞カッチャ。

上の用例で、話し手は、話し手に道を聞いた人が誰かの父親(母親)であるかどうかはもちろん知らないし、確かめもしていない。ただ年恰好からみて壮年期の男(女)だという意味で、オトツァマ(オッカサマ etc)と言っている。

⑦ オバンチャン・オジンツァン・バツパヤン・ジッチヤン等、表に示した祖父・祖母を意味する一連の単語は、そのまま年齢階梯語となって、老年期にある男女をさす。

⑧ 老人は、老年期にある男女一般をさすほかに、老女に対して、老年期の男だけをさして使うこともある。少女に対する少年も同じ。

⑨ 老人を性別に表わす俚言として、オトコトシヨリ・オナゴトシヨリ・トシヨリオトコ・トシヨリオナゴという俚言もある。

今夜ワ 観音様サ オナゴトシヨリ(オトコトシヨリ)バリ アズバッテ 山ノ神講ダ。

Ⅶ メ モ

① 名称から呼称のカテゴリーへ

オトツツァン・オッカヤン・ジッチヤン・バツパヤン・オンツァン・オバヤン・アンチャン・アネヤン等、父母・祖父母・おじおば・兄姉の名称は、呼称にもなる。これに対して、子ども・おいめい・いとこ・弟妹等の名称は、呼称にはなり得ない。

② 名称から年齢階梯のカテゴリーへ

オトツツァマ・オッカヤン・子ども・むすめ・ムスメッコ・アンチャマ・アネサマ・ジッチ・バツパ・オンツァン・オバヤン等、父母・子・娘・兄姉・祖父母の名称の多くは、そのまま年齢階梯語彙のカテゴリーに移行する。

③ カテゴリー内の単語の多少

親子・祖父母・きょうだい・夫婦のカテゴリー内では単語の数が多く、相互の対立の仕方が複雑である。これに対して、孫以下の直系卑属およびきょうだい以外の傍系尊・卑属のカテゴリー内では単語の数が非常に少なく、相互の対立の仕方もきわめて単純である。

④ いくつかのカテゴリーにおける単語の欠如

ア 親を表わす単語はあるが、親の親・親の親の親を(性別を入れないで)表わす単語は標準語にも福島北部方言にもない。

イ 子ども・孫を性別を入れて表わす単語はあるが、子の子の子以下を性別を入れて表わす単語は標準語にも福島北部方言にもない。

ウ 子どもを出生順に表わす単語はあるが、きょうだいを出生順に(性別を入れないで)表わす単語は標準語にも福島北部方言にもない。

エ 子どもを家の相続の観点から表わす単語はあるが、きょうだいを家の相続の観点から表わす単語は標準語にも福島北部方言にもない。

オ 親のきょうだいを(性別を入れないで)表わす単語は、標準語にも福島北部方言にもない。

カ 親のきょうだいを父方・母方別に、親の親のきょうだい祖父方・祖母方別に、親のきょうだいの子を父方・母方別に表わす単語は、標準語にも福島北部方言にもない。

キ きょうだいの子同士の関係を性別を入れて表わす単語は、福島北部方言にも標準語の話しことばにもない。

ク いとこの子同士の性別を入れて表わす単語も同様である。

ケ 大本家——本家——新宅(分家)——コシンタク(孫分家)と、家の縦の系列を表わす単語はあるが、横の系列を表わす単語はない。

補 遺

ニダイツギ 福島北部方言社会の親族組織および婚姻慣習の一つをさす単語としてニダイツギというのがある。これは、既婚の兄が死亡して、あとにその妻(およびその子ども)が残された場合、まだ未婚の弟(多くはすぐ下の弟)が未亡人である兄嫁と新たに縁組みして、その家を継ぐことを言う。この慣習がいつごろからあったものかは、調査してみないと、わからないが、太平洋戦争中とその直後には戦死した兄をめぐってよく行なわれたものである。おそらく家の制度、とりわけ家の制度の中核にある本家の維持と、生産活動に欠かせない男子労働力の確保との二つの大きな目的の下に行なわれたものであろう。多くの場合、親や親類縁者の圧力に屈して、兄嫁と弟が泣く泣くニダイツギをするというのが実情であったようである。家の制度の変った現在、若い人たちの間で、このニダイツギということばは知っている人は、ほとんど居ないようだ。

第Ⅱ部 福島北部方言の形容詞の語彙体系

① 第2部は、福島北部方言の形容詞(形容動詞を含む)を標準語のそれと対照させながら、意味によって分類し、必要と認めた単語についてはその意味・用法を記述したものである。

② 形容動詞は、その語幹がしばしば名詞と紛れやすい。名詞か形容動詞かの認定の枠も人によって広狭がある。国語辞典でいえば、たとえば岩波国語辞典は認定の枠が狭いし、これに比べると、三省堂国語辞典は枠がずっと広いという具合である。問題の多い所ではあるが、本稿ではこのことにそれほど関心を払わなかった。ちなみに岩波国語辞典は次の三つの基準をあげ、これに合うものだけを形容動詞と認定している。

a 「——に」の形が広く(「なる」「する」だけでなく)動詞に対して副詞と同様の

連用修飾の働きをすること。 b 連体修飾語となる時の形が「—な」であること。 c 「だろ・だっ・で・に・だ・な・なら」の活用語尾が原則としてそろっていること。(同辞典「品詞概説」)

この三つの基準を借りていうと、本稿では b c 二つの基準にあったものは形容動詞である(または、名詞でもあるが、同時に形容動詞でもある)と認め、a の「広く動詞に対して～」の基準は必ずしもとらなかった。いま標準語の活用と対照させるために、それに準じて福島北方言の活用を示すと、次のようになる。連用形——ダッ(タ)——デ(ナイ)・——ニ、終止形——ダ、連体形——ナ、仮定形——ダラ・——ナラ(——ダラと——ナラとは、前者が方言本来の形、後者は標準語の影響による新しい形だが、老人層の日常会話にもよく出る形である。)

したがって、岩波国語辞典の規準では名詞であって形容動詞ではない、または形容動詞的用法をもった名詞とされる標準語のかんりの単語、およびもしそれを適用するとすれば、おそらくはそうのようにされるであろう方言のかんりの単語が、本稿では名詞でもあるが同時に形容動詞でもあると認めている。つまり品詞認定ではきわめて大ざっぱな立場をとったことになる。なお、堂々と・堂々たるの類は、それぞれ副詞・連体詞と認定し、口語の形容動詞とは認めなかった。

③ ——だらけな・——まみれな・——げな・——的な・——らしい・——っぽい・——にくい・——やすい・——づらいなどの接尾辞がついて、または名詞や漢語要素に無(ぶ)・無(む)・不(ぶ)・不(ふ)の接頭辞がついてなど、接辞をつけることによってかなり規則的に派生させることができる多数の形容動詞・形容詞については、そのうちいくつかあげたものもあるが、そのすべてをあげることまではしていない。そのほかにもわたしの不注意からおちているものが、かなりあるだろう。これらの補訂についてはわたしの今後の仕事としたい。

④ 単語の意味による分類については、国立国語研究所資料集6『分類語彙表』(林大第4研究部長担当)や宮島達夫氏「方言の語彙体系」(『国語学』36輯)等の研究を参照した。たいへん参考になったが、さりとて現在まだわたし自身の充分な成案があるわけではない。言語学者でない私には、形容詞・形容動詞の意味による分類は、第1部の親族語彙の場合に比して、はるかにむずかしい。本稿は、文字

どおりの試みである。この点は②にのべたことともあわせて、改変の余地は大いにあるだろう。これもわたしの今後に課せられた大きな課題の一つである。

⑤ 単語の意味・用法の記述を必要と認めた範囲は、次の二つである。

a 福島北部方言にあって、標準語にない単語。いわゆる俚言。

b 標準語にも福島北部方言にもあるが、方言としての意味・用法が標準語のそれに比べて、ずれているもの。

標準語にも福島北部方言にもあって、意味・用法が両者に共通しているものは、単語の語形(連体形)をあげるにとどめる。

⑥ 福島北部方言にあって標準語にない単語(かたかな書き)、福島北部方言にも標準語にも共通する単語(漢字・ひらがな書き)、標準語にあって福島北部方言にない単語(*印をつけた漢字・ひらがな書き)のそれぞれの表記の仕方は、非常にラフな方法ではあるが、第1部親族語彙の場合の方法に準じた。(注1)

⑦ たとえば、人間の感情を表わす形容詞・形容動詞は、プラス(快)とマイナス(不快)のどちらの感情を表わす単語が多いか。同じように、人間の態度・行動・性格を表わす形容詞・形容動詞は、プラス・マイナス・ニュートラルいずれの評価の上に立ったものが多いかなどの問題も、形容詞・形容動詞の意味記述の上では興味ある問題であるが、これは、今後のわたしの課題とした。

⑧ 形容詞・詞容動詞の語構成に関する問題も、今後の課題とした。

1 人間の生理・肉体的状態に関する形容詞

1.1 生 育

若い *若々しい *うら若い *初々しい

チャッコイ チチャコイ チンチャコイ チンチイ メンチャコイ チャメコイ メンチイ マメコイ ちっちゃい 小さい *幼い *いとけない *頑はない *矮小な

ズナイ ズンナイ でかい でっかい オッキイ 大きい

*早熟な *未熟な *乳くさい

*先天的な *後天的な

① チャッコイ・チチャコイ・チンチャコイ・チンチイ メンチャコイ チャメコイ メンチイ・マメコイは、いずれも小さいに対応する俚言。幼い・いとけない等の単語とも対応する。これらの単語が相互にどのような勢力分野をもって対立しているかは、今少しくわしく調査した上でないと、はっきり言えない。

② オッキイは、大きいの訛語。ズナイ・ズンナイは、大きいの俚言。オッキイ・でかい・でっかい・ズナイ・ズンナイの間には、使用の広がり・強さの上では違いがあるが、意味・用法の上ではほとんど違いはないようである。

③ 早熟なという形容動詞はない。ませるという動詞の活用形で間に合わせている。

1.2 健康

達者な 丈夫な 元気な 強い まめな がんじょうな 血気盛んな 血気盛りな
*健康な *すこやかな *たくましい *頑健な *壮健な *強健な *強靱な *屈強な *剛健な *つつがない *タフな *健全な
弱い ヨワカスナ ガンタレナ *ひよわい *ひよわな *弱々しい *かよわい
*虚弱な *幼弱な *病的な *足よわな

① ヨワカスナ 弱い・ひよわい・虚弱な等に対応する。語幹は弱い者・弱虫の意の名詞でもある。「病氣バリ シテ ——ナ 奴ダ」^(注)「——バリ アズバッテ ホダコト デキッコ ネー」

② ガンタレナ 伊達郡旧茂庭村で採集した俚言。意味用法はヨワカスナと全く同じ。語幹は名詞でもある。

(注) ——ナの——は、ヨワカスの略。問題になっている形容詞・形容動詞の語幹を示す。以下、すべてこれに準ずる。なおこの報告の末尾の注7を見よ。

1.3 容貌・肢体

ヤセコナ でぶな のっぼな ずんどうな スマートな おもながな マルポッチャナ
*やせぎすな *丸ぼちゃな *豊満な *頭でっかちな
ふくぶくしい 貧相な ウツクシイ 美しい きれいな こぎれいな ミグサイ
ミッタクナイ *みにくい *みっともない *みすぼらしい *みぐるしい *醜悪
な *むさい *むさくるしい *端麗な *清楚な

① ヤセコナ やせているさま。やせぎすなに対応する。語幹は名詞でもある。「——ナ オナゴ」「——ト デブ」

② マルポッチャナ 丸ぼちゃなの訛語。「——ナ 顔ノ 娘」

③ ウツクシイ 美しいの訛語。意味用法が標準語と少しちがう。(注8)

④ ミグサイ・ミッタクナイ みにくい・みっともない・みぐるしい等に対応する。ミグサイとミッタクナイとは、ミグサイのほうがやや上品なニュアンスをもつ。「——イ 顔」「人前デ ——イコト スンデ ネーゾ」 ミッタクナシ・

ミタクナシは、ミッタクナイから派生した、みにくい人の意の名詞。特に女性をいやしめたり、ののしったりする時によく使う。

⑤ 頭でっかちな意味は、ふつうフクスケアタマ(福助頭)で表現する。「フクスケアタマノ ワラシ」

II 人間の社会的状態に関する形容詞

2.1 人間関係

コワシイ 近い 近しい *親しい *むつまじい *親密な
遠い 縁遠い *疎遠な *うとい

① コワシイ 人と人との間に心理的距離感や遠慮・違和の感情が介在しないさま。「年 トッテ クット 女親ワ ドーシテモ 娘ノホーガ 息子ヨリモーク ナル」「アノ家トワ ——イ 間柄ダ」

② 人間と人間の親密関係は、ふつうナカイイ・ナカワリイで表わすことが最も多い。

2.2 運——不運

シシャーセナ ゴホーベンナ 好都合な *しあわせな *幸福な *幸運な *幸いな *幸甚な

ブッシャセナ フシャーセナ 因果な 不都合な あいにくな *ふしあわせな *不幸な *不運な

① シシャーセナ・ブッシャセナ・フシャーセナ しあわせな・ふしあわせなの訛語。意味用法は標準語と同じ。語幹は名詞でもある。

② 不幸は形容動詞としては使わない。名詞として使うのも、おおむね家族・親戚の者などの死の場合に限られている。

③ ゴホーベンナ 幸いな・幸運な・好都合などに対応する。「会社 ッブッチ ドー スッカト 思ッテタラ 世話スル 人 アッテ コノ会社サ ットメラッチャ。 ——ナコッタ」

2.3 貧 富

フクシイ *裕福な *富裕な
貧乏な *貧しい *貧困な

① フクシイ 裕福な・富裕な等に対応する。「株デ 儲ケテ ——ク ナル」

② 福島北部方言で、フクシイの反対語は、貧乏なであって、貧しいではな

い。

2.4 名誉——不名誉

名誉な 不名誉な

2.5 有名・知名

有名な *名高い *著名な

2.6 学問・常識・知識

無学な 世間知らずな ワケワカラズナ 非常識な 明るい 暗い うとい *博学な *該博な *無知な *蒙昧な *頑冥な *一知半解な *無定見な

① ワケワカラズナ 物事の道理をわきまえないさま。わけがわからないさま。「——ナ オヤジ」「——ナコト 言ウナ」

2.7 多忙——ひま

忙しい せわしい カッチェワシイ 気ぜわしい せわしない *多忙な *あわただしい

ひまな 手もちぶさたな たいくつな

① カッチェワシイ せわしいを強めた言い方。俗語的ニュアンスが強い。「毎日 コー ——クテワ ヤリキンニ」

2.8 にぎやかさ——さびしさ

にぎやかな *にぎにぎしい *にぎわしい *繁華な
サブシイ さびしい *草深い

① サブシイ さびしいの訛語。

2.9 孤独

*孤独な *ひとりぼっちな

① 福島北部方言では、孤独な・ひとりぼっちなはもちろん、これに代わる形容詞・形容動詞もない。「アノ人モ ヒトンジェ(=ひとりで) サブシカンベ」「アノ人ワ イツモ ヒトンジヤカンナ(=ひとりだからな)」などと、ひとりを使っ

Ⅲ 人間の感覚に関する形容詞

3.01. 感覚の働き

敏感な するどい 強い 過敏な 鋭敏な
鈍感な にぶい 無神経な 弱い

3.02 眠り

眠い 眠たい

3.03 空腹・満腹感

*空腹な *ひもじい *ひだるい

クッチイ ハラクッチイ *くちい *腹くちい *満腹な

① 福島北部方言には空腹感を表わす形容詞がない。ふつう「腹ガ ヘル」で表わす。

② クッチイ・ハラクッチイ くちい・腹くちいの訛語。

3.04 倦怠・疲労感

コワイ だるい かったるい

① コワイ ⑦ 疲れた・くたびれた・だるい状態を表わす。「夏負ケニ ナッタノカ 体ガ ——クテ ショーガ ナイ」 ④ 容易でない・むずかしい・困難だ等に対応する。「コンナニ 稲熱病ガ デテワ 反当り 6俵 取ルノモ ——ク ナッタナ」

3.05 痛覚・皮膚感覚

痛い カイイ ムズガイイ くすぐったい *かゆい *むずがゆい *こそばゆい
煙い 煙たい

① カイイ・ムズガイイ かゆい・むずがゆいの訛語。

3.06 視覚・明暗感覚

マツポイ *まぶしい *まばゆい *めざとい ほかは→6.22 明るさ——暗さ

① マツポイ まぶしい・まばゆいに対応する。「オテナトサマガ ——イ」

3.07 色彩感覚 → 6.19 色

3.08 味覚 → 6.21 味

3.09 嗅覚 → 6.20 におい

3.10 温度感覚 → 6.24 温度

3.11 聴覚 → 6.25 音・声

IV 人間の感情・心理的状态・態度に関する形容詞

4.01 愛情

モゴイ モゴサイ メゴイ メゴコイ メンコイ ヤサシコイ エーラシクナイ
かわいい かわいらしい *愛らしい *愛くるしい *いとしい *いとおい
*可憐な

① モゴイ・モゴサイ かわいい(愛情)とかわいそらな(憐憫・同情)の二つに

対応する。「誰デモ 我ガ子ワ ——イ」「他人ノ ワラシ ホダニ モゴサガルナ」「シンショ——イ 人ワ ショデ(=最初)ノ ワラシ アル オカタガ 死ヌト アトワ ゴケデ 通スンダ」「コダチャッコイ ウチカラ 親ニ 死ナレテ ナンテ ——イ ワラシダコト」以上四つの用例のうち最初の二つは、かわいいに、最後のは、かわいそうなに対応する。

②. メゴイ・メゴコイ・メンコイ かわいらしい・愛らしい・愛くるしい等に対応する。モゴイ・モゴサイとはちがって、人・動物・物などの姿・顔・かたちが、いかにも子どもらしくて、または小さくて、愛らしいの意。「——イ 顔ノ オドッコ」「——イ ワラシ」「——イ 茶碗」(註9)

③. ヤサシコイ かわいい・かわいらしい・やさしいに対応する。㉞.「気ダテ(・気持・性根)ノ ——イ 娘」㉟.「——イ 顔ノ ワラシ」㊱.「少シ——イコト 言ウト スグ 図ニ 乗ル」㊲.「何ト マア ——イ 指(・手)ダコト」以上の用例のうち、㉞はやさしいの意味。㉟はかわいい・かわいらしいの意味。やさしいの意味にもとれる。㊱はやさしいの意味。㊲はかわいい・かわいらしいの意味である。

なお福島北部方言には、たやすい・かんたんだ・苦勞しないのでできるの意味をもつヤサシコイがある。(標準語の易しいに対応する。)
「コダ ——イ 問題 デネノカ。オンツァマダナ。」

③. エーラシクナイ かわいらしくない・にくらしい・こつらにくい・モゴサクナイなどの意味。(エーラシイという形はない。)
「親ノ 言ウコト 少シモ 聞カネデ。 ——イガキダ」(→4.18 憎しみ)

4.02 憐憫・同情

モゴイ モゴサイ ふびんな かわいそうな 気の毒な あわれな *いたいたしい
*いたいたしげな *痛ましい *痛わしい *いじらしい *涙ぐましい *無慙な
*同情的な

①. モゴイ・モゴサイについては、→4.01の①

4.03 快感——愉快・壮快・爽快等

ユーカイイ オモシャイ おもしろい 楽しい 愉快的な *痛快な *快い*心地よい
*壮快な *爽快な *快適な *さわやかな *すがすがしい

①. ユーカイイ たとえばブランコ・シーソーなどに乗って、前後・上下にゆ

れる時に味う快感。心理的なものというよりは、むしろ感覚的なものと言ってしまったほうが適切かと思われる、あの快感がユーカイの代表的な例である。標準語にはこれにぴったり対応する形容詞がない。「樞サ 乗セラッチ ウントーイカッタ」

②. オモシャイ おもしろいの訛語。オモサイとも。

③. 快い・心地よい・爽快な・さわやかななどの意味は、ふつうキモチイイで表わすことが最も多い。

4.04 おかしさ・滑稽感

滑稽な おかしい オモシャイ おもしろい ちゃんちゃらおかしい *笑止な
*片腹いたい

4.05 恋慕

好きな 大好きな *恋しい *したわしい

①. 男女間の恋愛感情も好きな・大好きなで表わす。

4.06 好感

好きな 大好きな

4.07 親愛・親近感

コワシイ 近しい 心安い 気安い *親しい *親密な *むつまじい *ねんごろな

①. コワシイ → 2.1の②

4.08 喜び

うれしい めでたい *よろこばしい

4.09 安楽感

楽な 気楽な のんきな *安楽な

4.10 感謝

ありがたい もったいない *かたじけない

4.11 安心・自信・信頼感

安心な たのもしい 末たのもしい 心強い 気強い *気丈夫な *心丈夫な

4.12 期待感

まちどおしい

4.13 願望

望ましい *願わしい

4.14 満足感

満足な 思わしい

4.15 得意感

得意な 自慢げな 有頂天な *誇らしい *自慢たらしい *誇り高い *晴れがましい *鼻高々な

4.16 威厳・壮厳感

いかめしい おごそかな 神々しい *けだかい *壮厳な *厳肅な

4.17 憤懣・怒り

いまましい しゃくな こしゃくな *腹立たしい

4.18 憎しみ

憎い 憎らしい こにくらしい つらにくい こつらにくい エーラシクナイ (→4.01の③) *にくたらしい *にくにくい *心にくい

4.19 嫌悪・反感

きらいな 大きらいな いやな ヤンダ 煙たい 胸くそ悪い きざわりな きざな *いまわしい *のろわしい *いやらしい *にがにがしい

①. ヤンダ いやなに対応するが、活用が特殊である。連用形 ホダコト スンノ モー ヤンダク ナッタ(そんな事をするの、もういやになった)。終止形 オメモ ホダコト スンノ ヤンダベ(お前もそんな事をするの、いやだろう)。オラ ホダコト スンノ ヤンダ (俺は、そんな事をするの、いやだ) 連体形 ヤンダ 人(いやな人)。假定形 ヤンダダラ (ヤンダナラ・ヤンダラ) スッコトネー(いやなら することはない)。

4.20 不愉快

*つまんない こつまんない *不快な *不愉快な *つまらない *あじけない *あじきない

①. 福島北部方言では、不快・不愉快・あじけない等の意味は、ユーカイイ・オモシャイ・楽しいなどの否定形で表わすことがふつうである。

4.21 苦痛

痛い 苦しい 心苦しい 胸苦しい 息苦しい 寝苦しい 暑苦しい 重苦しい
～苦しい つらい セツナイ コセツナイ イキボツタイ

①. セツナイ 福島北部方言のセツナイは、標準語のせつないに比べて、そ

の意味用法が非常に広い。㊸「貧乏暮ラシデ 毎日 銭 ネー 銭 ネーッテ
 イルノモ ——イコトダ」㊹、「オラエノ チャッコイ 娘 熱 出シテ ウナ
 ッテ 寝テル。ナンボカ ——イカンベ」『娘バツカデ ネー。側デ 見テル 親
 ダッテ ——イゾエ』㊺。「ワラシ(・犬・猫)ガ カラマリツイテ ナンダッテ
 ——イコト」『ワガ ワラシ(・犬・猫)ダ。ソダニ ——ガルナ』㊻「隣リノ ラ
 ジオ 音 デッカクテ ナンダッテ ——ナイコト」

以上三つの用例のうち、㊸㊹は標準語のせつないの意味用法に非常に近く、㊺
 ㊻はそれから非常に離れている。むしろうるさいと同義だと言ったほうがよい。

②. コセツナイ セツナイに強意の接頭辞のついた形。

③. イキボツタイ 息苦しい。たとえば映画館(・バス)が満員で、しかも戸を
 しめきってあるために、人いきれがするような状態の場合に使う。ただし、急な
 坂道をのぼったときに感じる息苦しきなどはイキボツタイではない。それは、ふ
 つう「息ガ ハカハカスル」という。

4.22 うるさき

ウツァシイ コウツァシイ セツナイ コセツナイ カカラシイ うるさい ヤ
 かましい テソズラシイ

①. ウツァシイ ㊷. 子ども・犬・猫などが側でうるさくしたり、体にか
 まりついたりして、不快な気持である。「ワラシドモ ——クテ 仕事 デネ」
 ④. 騒音などがうるさくて、不快な気持である。「ユンベワ ヨッピテ 風 吹イ
 テ——カッタナイ」『福島アタリサ タマニ 行グト 頭 イタク ナッチマウ。
 ——クテ』㊸. 手足・顔などの身体、または身体につけている衣類が濡れたり、
 汚れたりして、または、乱雑で汚ない状態のために、不快な気持である。「水仕
 事ワ ——クテ ヤンダナイ」『毎日 雨バツカ 降ッテ ——イナイ』「——イ
 便所ダコト」以上のうち㊷④は、セツナイの㊸とはほぼ完全に重複する。

②. コウツァシイ ウツァシイを強めた言い方。

③. カカラシイ 自分の心の動きやその時やっている事がはたからチョイチョ
 イとじゃまだてされて、不快な気持である。気になって、うるさい。「頭ノ毛ガ
 顔サ カカッテ ——イ」『仕事 シテル ソバ 歩キマワッテ ——イ ワラシ

ダ]「オモテ オートバイ 何台モ 通ッテ ナンダッテ ——イナイ」

4.23 やりきれなさ

ヤリキンニ タマンネ やりきれない たまらない 居たたまれない *やるせない

① ヤリキンニ・タマンネ やりきれない・たまらないの訛語。

4.24 悩ましさ

*悩ましい *狂わしい *狂おしい

福島北部方言には、この項の意味を表わす形容詞がない。たとえば「事業に失敗して悩ましい日日を送る」は、「事業に失敗して、困っている(・苦労している)」などです。「悩ましい女の裸体写真」は、「すごい(・ものすごい)女の裸の写真」などです。「濡れ場を見せつけられて、悩ましい気持になる」の悩ましいは、おかしい・へんななどの単語を使う。

また、狂わしい・狂おしいの意味は、ふつう、シンケ(=気狂い)になってしまいそうだ・タカッてしまいそうだ・狂ってしまいそうだ・気がおかしく(・へんに)なってしまいそうだなどと言って表わす。

4.25 悲しさ

悲しい あわれな *物悲しい *悲痛な *沈痛な *悲愴な

4.26 憂鬱感

陰気な 陰気くさい うっとりしい ドモドモシイ 辛気くさい *憂鬱な *ものうい *陰鬱な *沈鬱な

① ドモドモシイ 天候・空気などがどんよりとして、はっきりしないさま。うっとりしいにほぼ対応する。たとえば、戸障子・窓をしめきった部屋や土蔵の中の空気、つゆ空のはっきりしない天気などがドモドモシイの代表的な例。

4.27 ばかばかしさ

ばかばかしい ばからしい ばかくさい コツァカナイ くだらない

① コツァカナイ ばかばかしい・ばかくさい・くだらないなどの感情を表わす。

「ソダ話 聞イテランニ ——クテ」なお 6.51 ①

4.28 羞恥心

ショーシイ カッコワリイ 照れくさい *はずかしい *面はゆい *きまり悪い
*晴れがましい

① ショーシイ はずかしいと対応する。ショーシガル(=恥ずかしがる) ショーシガリ(=恥ずかしがり)の派生語もある。「——クテ 挨拶ナンテ デキネ」「——ガッテ 人前サ 出タガンネ」「——ガリナ 娘」

② カッコワリ きまり悪い・はずかしいとほぼ完全に対応する。「オラ——イカラ ホダコト 先生サ 言ワンニ」

4.29 罪悪感

やましい 後ろめたい 後ろ暗い

4.30 違和感

気まずい 気づまりな みずくさい 窮屈な よそよそしい そっけない かたくなる
しい そらぞらしい

4.31 恨み

うらめしい

4.32 恐怖感

おっかない おそろしい 末おそろしい 気味わるい うすきみわるい *こわい
*不気味な *空おそろしい

① 福島北部方言のコワイは、標準語のこわいとは、まったくの異義語。

4.33 嫉妬

*ねたましい

福島北部方言には、この項の意味を表わす形容詞がない。嫉妬を表わす方言の動詞ヤカム・嫉妬スルを使う。

4.34 羨望感

コノマシイ *うらやましい

① コノマシイ 標準語のこのましいとは、意味用法が非常にずれている。「ソノハイカラナ キセル ドコデ 買ッテ キタ。——イナ」「ソノナニ 人ノ 持ッテンガナ ——ガルモンデ ネー」前の用例のコノマシイはうらやましい、俺もほしいの意。後の用例のコノマシガルは、うらやましく思っ、ほしい思うの意。

4.35 心配・不安感

心配な 気がかりな 心もとない 心細い おぼつかない 不安な *気づかわしい

4.36 残念・不満足感

デカサナイ 残念な 残り多い 物足りない 不満足な くやしい *無念な *おいしい *くちおいしい *不本意な

① デカサナイ こんな状態では、または、物事が予想していたようにはうまく取り運ばずこんな結果になって、残念だ・意にみたくない・不満足だ・つまらない・感心しないなどの意味を表わす。もともとデカスという動詞の否定形であるが、現在では独立した形容詞と認めるべきである。「コダ恰好デ 人前サ 出シテ ノワ アンマリ ——イナ」「米 モット 取レッカト 思ッタラ 6俵シカ 取シニカッタ」「ソイツワ ——カッタナイ」「折角 シンセツギ (=親切心) 出シテ ヤッテ ヤッタノニ カエツテカ オンツァッチヨ。 ——カッタナイ」「コレデ 兄弟 ナイノモ ——イモンダゾイ」

4.37 惜しさ

イタマシイ 残り多い なごりおいしい もったいない *おいしい くちおいしい *残りおいしい

① イタマシイ 惜しいに対応する。「コノ本 ——イゲンチョ オメーサクレル」「銭 千円 ホロツテ ——カッタイ」「平社員ニ シテ オクニワ ——イ 人ダ」「ソダニ ——ガンネデ 俺サ クレロ」

4.38 所有欲

ほしい

4.39 慨嘆

なさけない *なげかわしい

4.40 困惑

サタナイ

① サタナイ 予期しない事態に直面して、困惑している感情を表わす。標準語にはこの感情を表わす形容詞がない。「人ノ 大事ナガナ ポッコシタナンテ ——イコト ヤッテ クッチャナ」「イイカゲンナコト シテット アトデ ——ク ナツォ」

4.41 さびしさ

スゲナイ トーゼンナ サブシイ さびしい *ものさびしい *わびしい *さみしい

① スゲナイ さびしい・わびしい・あじきない・たいくつ等の意味領域とは

ぼ重なる。標準語のすげないとは意味が全く異なる。「弥作 ヤンモ オッカニ
死ナッチ ゴケグラシダ。ナンボカ ——カンベ」「娘 嫁ニ クレッチマッタ
ラ 急ニ ——ク ナッタ」「折角 頼ミサ 行ッタノニ 断ワラレタ」「ソイツ
ワ ネッカラ ——カッタナイ」「アソコノ 葬式モ ネッカラ 来ル 人モ
少ナクテ。——イモンダ」「話シ相手 居ネモンダカラ ——ガッテル」

② トーゼンナ トゼンナとも。スゲナイと意味用法が同じ。ただし現在では
スゲナイよりも使用することがずっと少ない。

4.42 わずらわしさ

面倒な 面倒くさい しち面倒くさい しち面倒な コメンドークサイ イケメン
ドークサイ イケメンドーナ 厄介な ややこしい 大儀な おっくうな わずら
わしい *煩雑な *煩瑣な

① コメンドークサイ 面倒くさいを強めた言い方。

② イケメンドークサイ・イケメンドーナ 面倒くさい・面倒なを強めた言い
方。俗語的ニュアンスが強い。

4.43 焦燥感

じれったい はがゆい まだるっこい まだるっこしい *もどかしい

4.44 疑惑感

ユカシイ あやしい くさい おかしい へんな 妙な 奇妙な 不思議な *疑わ
しい *いぶかしい *不思議な

① ユカシイ あやしい・くさい・疑わしいなどに対応する。たとえば物がなくな
った。あいつがどうもあやしいなどと言うとき、「アノ奴 ——イカラ 気
許スナヨ」などと使う。また、次のようにも使う。「アシタ 試験ノ 発表ダゲ
ンチョ 出来 良ク ネーモンダカラ ——クテ 眠ランニ」つまり気がかり
で、心が落ちつかない・心配だの意味もある。古語のゆかしの意味、たとえば
「いつかたへかとゆかしうて、人を付け奉りて見せたりければ」(『大鏡』)のゆか
しの意味がずれた形で今日に残ったものであろう。

4.45 意外感

意外な 案外な 思いがけない 予想外な ネッカラナ *心外な *存外な

① ネッカラナ 予想していたほどでない・意外ななどの感情を表わす。陳述
副詞として使うことが多い。「モット 骨折ッテ クレックト 思ッテタノニ

—ナ人ダ」「——オモシヤク ナイ 本ダ」「—— 頭ノ ワリイ 奴ダ」

4.46 恐 縮

おれれ多い 申しわけない すまない

4.47 退屈感

退屈な

4.48 多忙感

忙しい せわしい カッチェワシイ 気ぜわしい せわしない *あわただしい
*多忙な

① カッチェワシイ→2.7の①

4.49 機 嫌

上機嫌な 不機嫌な

V 人間の態度・行動・性格に関する形容詞

5.01 上品・りっぱ——下品・俗悪

上品な りっぱな とうとい たつとい えらい 清潔な きれいな 美しい *気
高い *清らかな *清い *崇高な *偉大な *高潔な *廉潔な *高尚な *高貴
な *高雅な *ゆかしい *おくゆかしい
下品な きたない きたならしい 不潔な いやしい いやらしい さもしい あさ
ましい げすな はしたない いかかわしい *下劣な *俗悪な *低俗な *卑俗
な *野卑な

5.02 善悪・正邪

良い いい 正しい *善良な
悪い よこしまな 悪質な 不正な あくどい あくらつな 不法な 無法な 極道
な 邪悪な 無法な 不届きな 罪つくりな 罪深い しょうわるな *無軌道な
*理不尽な *悪逆な *悪道な *悪辣な

5.03 奇特・殊勝

感心な 奇特な *殊勝な *神妙な

5.04 直 曲

すなおな まっすぐな *神妙な
キタムキナ アマノジャクナ ソンコナ *つむじまがりな *偏屈な

① キタムキナ 暖かいといえは寒い、寒いといえは暖かいと言うような、ひ
ねくれた態度・性格のさま。北向きの意味から派生したものでらう。つむじまが

り・偏屈と対応する。「アイツワ——ナ 奴ダカラ 相手ニ スンナ」

② アマノジャクナ あまのじゃくが形容動詞に転成したもの。語幹はもちろん名詞でもある。意味用法はキタムキナと同じ。「——ナコトバリ 言ッテルト人カラ 相手ニ サンニゾ」

③ ソンコナ 伊達郡旧茂庭村で採集した俚言。意味用法は前の2語と同じ。「——ナ 親爺」「——坊主」

5.05 気まま・わがまま

わがままな 気ままな 勝手な 身勝手な 得手勝手な *ほしひままな *奔放な

5.06 正直・まじめ・誠実・純朴——狡猾・ふまじめ等

正直な 真正直な ばか正直な まじめな ばかまじめな きまじめな くそまじめな 誠実な 実直な りちぎな 義理がたい かない カタシイ 純朴な 素朴な うぶな 無邪気な *質朴な *朴訥な *清純な *純情な *純真な *廉直な *廉潔な

不正直な ふまじめな 無責任な ずるい ズルコイ ズルカナ こすい スッコイ スッカラコイ カドイ 悪がしこい ずるがしこい 狡猾な あくどい 悪質な *しょうわるな *老獪な *悪辣な

① カタシイ 義理がたい・かない・りちぎな・実直な 等に対応する。「——イ 人柄」「——ク 考エル」「ソダニ ——ク スッコト ナイ」

② ズルコイ・ズルカナ とともにずるい・狡猾なに対応する。ズルカナは、タレカナ・ヤミカナなどと同じく、語幹が名詞になる。ずるい行為・人を意味する。「——イ 男」「——ナコト(・——) ヤッテワ 駄目ダ」

③ スッコイ・スッカラコイ とともにずるがしこい・こすい等に対応する。ただし後者のほうが前者よりも、使用の広がり広い。「アノ ヤロ ——クテ 氣許サンニ」

④ カドイ 賢い・抜目がない・狡猾だなどの意味をになう。賢いにしても、非難めいたニュアンスを常に伴なう。「アノ店ノ オヤジワ ——イカラ 人ニ 信用サンニ」「——イクライデ ナイト シンショナンテ ノコサンニ」

5.07 寛容・柔軟——狹量・がんこ

鷹揚な 太っ腹な おおらかな やわらかな やわらかい オッキイ でかい ズナイ ズンナイ *寛容な *寛大な *大きい *寛仁な *闊達な *磊落な *柔軟

な しなやかな

せせこましい せまい チャッコイ チチャコイ チンチャコイ チンチイ かた
い がんこな 強情な 強つくぼりな えこじな かたいじな いじっぽりな *狭
量な *偏狭な *小さい *小心な *一徹な *かたくなな *固陋な *頑冥な
*偏屈な

5.08 勤勉・熱心——怠情・横着

まめな こまめな 手まめな 足まめな コジリカルイ セードナ ネットイ 熱心な
真剣な 一所懸命な 懸命な *かいがいしい *勤勉な *真摯な *大童な *切
な

ものぐさな ぐらたらな なまくらな 横着な ずぼらな 不精な タレカナ カラ
ダヤミナ ヤミカナ ノーメスコギナ ズグダレナ ズグナシナ ギッタレナ
ショッタレナ クサシナ だらしない *怠惰な(注10)

① コジリカルイ コジリガカルイ・コジリノカルイとも言う。かいがいし
く、こまめに立働くさま。「——イ 嫁」「——ク 仕事スル」

② セードナ いっしょけんめい精を出して働くさま。「アノ家ノ 婿ワ——
ナ 人ダ」「イヤイヤ ——デ イラッタナイ(=いやいや 精を出して お働き
ですぬ)」「アノ人ワ ——ニン(=よく働く人ダ)」

③ タレカナ 勤労意欲がなく、仕事を怠けるさま。語幹は名詞でもある。
「——ナ 嫁」「——オナゴ(・ヤロ)」「——バリ シテ カセガナイ 男」タリカとも。

④ カラダヤミナ 怠惰で勤労意欲がなく、体を使って仕事をするのを嫌うさ
ま。語幹は名詞でもある。

⑤ ヤミカナ カラダヤミト・タンカナと同義。語幹は名詞でもある。「——
ニ ナル」「——息子」

⑥ ノーメスコギナ ちゃんとした働かれる体をもっていながら、働く意欲が
なく、めしばかり食ってごろごろしているさま。語幹は名詞でもある。

⑦ ズグダレナ 仕事に対してしまりがいいさま。語幹は名詞でもある。
「——ナ 男」

⑧ ズグナシナ ズグダレナと意味用法が同じ。いくじがないの意味もある。
語幹は名詞でもある。

⑨ ギッタレナ タレカ・カラダヤミ・ヤミカ・ズグダレ・ノーメスコギ等と

同義。弱い・弱虫の意味もある。語幹は名詞でもある。「何 サセテモ ワカンネ。——ナ 奴ダ」

⑩ ショッタレナ みなり・仕事などがきちんとしていないで、だらしないさま。不精なさま。語幹は名詞でもある。「——ナ オナゴ」「——ガガ」

⑪ クサシナ なまけもので、仕事・みなりなどがだらしないさま。ショッタレとはほぼ同義。語幹は名詞でもある。「——ナ 嫁」

⑫ 以上、福島北部方言には労働に対して人間が勤勉でないこと、怠惰・ものぐさであることを表わす俚言が多い。これらの俚言は、昔はおそらく相互の間にはっきりした意味の対立があったのだろうが、現在でははえぬきの老人層の間ですらその意味的対立をはっきりした形で指摘できる人は、ほとんどいないようである。つまりどれもこれも、ほとんど同義と意識されているのである。(注10)

⑬ 福島北部方言には、形容詞・形容動詞ではないが、労働に対して勤勉であることを表わす俚言も多い。次のようなものがある。カセギニン(=よく働く人)・セードニン(同前)ハタラキニン(同前)・シンポーニン(=しんぼうして、よく働く人)

⑭ ⑫⑬にのべた労働のさまに関する俚言が多いということは、おそらく古い村落社会の構造の中で、人々が労働に対してどのような態度や観念を一般的にもっていたかということと深いかかわりをもつ事柄なのであろう。今後における研究課題の一つである。

⑮ ネットイ→5.20の②

5.09 温和——粗暴

おとなしい おだやかな なごやかな やさしい ヤサシコイ すなおな やわらかな
物やわらかな 温厚な 穏健な 温順な 温和な *温良な *柔順な *柔和な
*しとやかな 従順な *たおやかな

乱暴な ムデパナ ムデナ きかない わんぱくな 荒い 荒っぼい 手荒な おて
んばな 野蛮な *やんちゃな *荒々しい *粗暴な *粗野な *どうもうな *狂
暴な *猛々しい

① ムデパナ・ムデナ 振舞・性格の粗暴・乱暴なさま。語幹は名詞でもある。「——ナ ワラシ」「—— ヤッテ ナンネゾ」「——ヤロ」

5.10 慎重・着実——軽 卒——向うみず

慎重な 着実な 手がたい たしかな 確実な

軽率な 軽はずみな 軽々しい あさはかな そそっかしい なまじっかな *無造作な
ホーデナイ 向う見ずな 無謀な 無鉄砲な 命知らずな

① ホーデナイ 思慮・考え・判断・記憶などのさだかでないさま。「月給ミナ 一晚ノ ウチニ 使ッチマッタナンテ ナンダッテ ——イコト シタナオメ」「オラエノ バッパモ ムスボレッツマッテ(もうろくして)コノゴロワ 何が ナンダカ ——ク ナッタ」「帽子 ドコサ 置イタカ ——イ」なおホ——デナシは、ホーデナイ コトをする人の意の名詞。

5.11 細心——不注意

注意深い 用心深い *細心な

不注意な 不用心な うかつな 不用意な 散漫な

5.12 重厚・謹厳——軽薄

*重厚な *重々しい *謹厳な

うすっぱらな おっちょこちょいな 上すべりな 上っ調子な トンビアガリナ
*軽薄な *軽躁な *浮薄な *軽佻な

① 福島北部方言には重厚・謹厳の意味を表わす形容詞・形容動詞がない。ふつらどっしりした・落ちついたなどとほかの品詞の単語を使う。

② トンビアガリナ 態度・性格にどっしりとした落ちつきがなく、うわついた事をするさま。語幹は名詞でもある。「イイ 年 シテ ——ナモンダカラ 家ノ 仕事 サレナゲテ(=捨ておいて) ナンシャデモ 顔 ダシテヤガル」「——ヤロ」

5.13 おてんば——しとやか

おてんばな わんぱくな やんちゃな 活発な チョロカラナ がさつな

おとなしい 静かな *しとやかな

① チョロカラナ 子どもなどがチョロチョロ動きまわって、落ちつきのないさま。語幹は名詞でもある。「——ナ ワラシ」「——ヤロ」

5.14 謹慎——不謹慎

つつしみ深い

不謹慎な はしたない *いかがわしい

5.15 勇敢・大胆——卑怯・臆病・卑屈

勇ましい 勇敢な 大胆な 不敵な ずぶとい ふとい *果敢な *凛々しい *け

なげな *剛胆な *勇猛な *精悍な *勇壮な *豪放な
 卑法な 臆病な オクビョウタカリナ コシヌケナ いくじなしな ふがいない
 *小胆な *小心な *無気力な *卑屈な *怯懦な *懦弱な *柔弱な

① オクビョウタカリナ 臆病など同義。タカリは、貧乏タカリ・肺病タカリ・神経タカリ(=気がい)のタカリと同じで、造語力がかなり強い。本来、はえがたかるなどのたかるから出たもの。つまりオクビョウタカリは、臆病にとりつかれたものの意。語幹は名詞でもある。

② イクジナシナ・コシヌケナ いくじなし・こしぬけが形容動詞になったもの。もちろん語幹は名詞でもある。

5.16 果断—優柔

いさぎよい 思いきりよい *果断な *果敢な
 にえきらない シンビラコイ 未練がましい *優柔な *優柔不断な

① シンビラコイ 態度・性格がはきはきしないで、決断力にとぼしいさま。優柔な・にえきらない等に対応する。「折角 嫁ノ 話 持ッテッタノニ 貫ウデモ ネー 貫ワネデモ ネー 。イツニ ナッタラ ハッキリスノカ。——イ 人ダ」シンビラコカスは、これから派生した動詞。シンビラコクするの意。「イツマデモ シンビラコカシテ ウント 言ワネ」

5.17 念入り—粗雑

念入りな ていねいな マテイナ きちょうめんな *周到な *入念な *丹念な
 *克明な *細心な
 雑な ぞんざいな 粗末な いいかげんな おろそかな なおざりな なげやりな
 でたらめな なまはんかな ナマラハンカナ でまかせな なまはんじゃくな ナ
 マラハンジャクナ 大ざっぱな がさつな モジャボナシナ 乱暴な *粗雑な
 *粗略な *疎漏な

① マテイナ することが粗雑(・いいかげん・ぞんざい・大ざっぱ)でないさま。⑦ 細かな所まで注意(・手)が行き届いているさま。「アノ人ワ 仕事ガ——ダ」雑巾 ——ニ カケル」「縫イ物 ——ニ 仕上ゲル」「俺モ 年トッタカラ 昔ノ コトワ ワッスッチャホー ヨケーデ ソー ——ニワ ワカンネ」「マンジュー ニツシカ ノコッテネーノカ。アンナニ アッタノニ。——ニ 食ッチャッタナ」④ 大事にして、そまつ(・むだ)な使い方をしないさま。儉約・けちに近い意味もある。「汗水 流シテ 取ッタ ゼニダ。——ニ 使エヨ」「アノ家督

息子ワ シャデ 来タッテ マンマモ 食ワセネンダッテ。——ダカラ「——ナ位デ ナイト シンショ ノコサンニ」「アノ人ワ ——ダカラ 雑巾ノ ハテマデ 粗末ニ シナイ」㊶ 礼儀にあついさま。「世話ニ ナッタカラ 酒デモ 買ッテ 置イテ イクカ」「ソダ ——ナコト スッコト ナイ」(註11)

② ナマラハンカナ 態度・行動がいいかげんで、じゅうぶんでないさま。

③ ナマラハンジャクナ ナマラハンカナと同義。

④ モジャボナシナ 物を粗末に扱うさま。子どもに何を買ってやっても、粗末に扱って、汚したり、なくしたりするような場合によく使う。語幹は名詞でもある。

5.18 ひかえめ・謙虚——でしゃばり・尊大

ひかえめな 遠慮深い 遠慮勝ちな 謙遜な *謙虚な *つつましい *しとやかな
*つつしみ深い *敬虔な

でしゃばりな さしでがましい おしつけがましい なまいきな こなまいきな こしゃくな 横柄な カスナ カスカタリナ コッペナ 無礼な 失礼な 失敬な
ぶしつけな *尊大な *高慢な *傲慢な *不遜な *暴慢な *おちゃっぴいな
*おこがましい *傍若無人な *しゃらくさい *猪口才な

① カスカタリナ さしでがましく、でしゃばりで、生意気なことを言ったりしたりするさま。語幹は名詞でもある。たとえば、頼まれもしないのに他人のことで気をもんで、騒ぎまわったりすると、「アノ奴 カス カタッテ」「カスカタリナコト シヤガッテ」「カスカタリヤロ」と言って、けなされる。子どもがおとなのするような事にまで口出しをすると、親は、「ホダ カス カタルモンデネー」と言って、たしなめる。

② カスナ カスカタリナと同義。語幹は名詞でもある。「嫁ノ クセニ ——ナオナゴダ」

③ コッペナ 子どもがおとなぶったような、生意気なことをすること。「——ナ ワラシ」「——バッカリ カタリヤガッテ 生意気ナ 奴ダ」語幹は名詞でもある。

5.19 明暗, 外向——内向

明るい 陽気な ほがらかな 明朗な 外向的な 社交的な 如才ない 気さくな
さくい 気軽な 気軽い *快活な *磊落な

暗い 陰気な 気重な 内気な 内向的な ヒッコミジアンナ 無愛想な 気むずかしい キブクサイ ムキナシナ *不愛嬌な *陰鬱な

① ヒッコミジアンナ 引込み思案が形容動詞になったもの。「オラエノ 息子ワ ——ナ 奴デ 困ッタ」

② キブクサイ 愛想がなくて、人づきあいがよくないさま。「——イ 顔ノ オヤジ」

③ ムキナシナ 愛想がないさま。キブクサイと同義。語幹は名詞でもある。

④ さくい 態度・性格がねちねちしないで、さっぱりとして明るいさま。気さくなと同義だが、これよりも使用の広がり広い。気さくいともいう。「気立テノ ——イ 娘」
「クレルッテ 言ウンダカラ ——ク モラッテ 置ケ」

5.20 淡泊——執拗

*淡泊な *恬淡な

しつこい ねばこい しぶとい 執念深い ねちこい ネットイ みれんがましい

*執拗な

あきっぽい あきやすい 気まぐれな 移り気な 忘れっぽい むとんじゃくな いさぎよい

① 淡泊な・恬淡なに対応する形容詞・形容動詞はない。ふつうあっさりした、またはしつこい・ネットイ・ねばこい等の否定形を使う。

② ネットイ 態度・性格・行動などのしつこくて、あっさりしていないさま。執拗でくだいさま。ていねいだ・熱心だの意味もあるが、これはマテイナ・セードナ・一所懸命などと違って、非難めいたニュアンス、マイナスの感情評価をつきまとうことが多い。たとえば畑の草をむしった。ていねいすぎるほどにむしったので仕事はあまりはかどっていない。こんなときに、からかい半分の気持で「——ク ヤッタナイ」、または非難の気持で「草ムシリ イツマデ カカッテンダベ。——イコト ヤッテッカラ ハカ イガネンダ」と言う。

店に客が来た。あれでもない、これでもない、いつまでも品定めばかりしていて、肝心の、品物を買うというところまでいかない。店の主人は、じれったい気持を押えて、これに応待している。こんなとき主人は、陰で「サッキカラ アレコレ 品定メバリ シテ イツニ ナッタラ キマンノカ。ナンダッテ ——イ オ客様ダコト」と、ぐちをこぼすことになる。

5.21 人情味の有無

親切な 情け深い 人情深い あわれみ深い 世話好きな ねんごろな 丁寧な 丁寧な ばか丁寧な 手厚い こまやかな *懇切な *懇愼な *慈悲深い *いつくしみ深い *暖かい 不親切な 不人情な 薄情な 冷たい そっけない つっけんどんな じゃけんな ぶっきらぼうな 無愛想な けんもほろろな ロクデナイ
ロクデナシナ *無慈悲な *無情な *非情な *酷な *冷酷な *冷淡な *すげない*つれない *いじわるな *とげとげしい *憎たらしい *酷薄な *残酷な *苛酷な *むごい *むごたらしい *残忍な *残酷な *残虐な *因業な

①, ロクデナイ・ロクデナシナ 標準語のろくでない・ろくでなしの意味のほかに、意地があるい・根性が悪いの意味をもっている。「ロクデナイ(・ロクデナシナ)オナゴ(・嫁・しゅうと)」は、意地があるい・根性がひねくれた女(・嫁・しゅうと)の意。ロクデナシナの語幹は、もちろん名詞でもある。

5.22 親密——疎外

人なっこい なれなれしい *親密な *したしげな *したしい
水くさい 他人行儀な よそよそしい すげない そっけない

①, 親密な・したしいの意味は、ふつう仲(ガ)イイで表現する。

5.23 公正——偏頗

公平な 平等な 公正な 平らな *公明な
不公平な 不平等な かたておちな *偏頗な

5.24 勝ち気——弱気

勝ち気な 負けん気な 強気な 負けぎらいな 負けずぎらいな 気丈な 気丈夫な
弱気な 気弱な

5.25 羞恥心

ジョーシガリナ てれくさがりな *はずかしがりな
あつかましい ずうずうしい 恥さらしな つらよごしな *恥知らずな *無恥な
*厚顔な *鉄面皮な *破廉恥な

①, ショーシガリナ ショーシガル(= 恥ずかしがる)から派生した形容動詞。語幹は名詞でもある。「——ナ 娘」

5.26 強い——弱い

強い がまん強い しんぼう強い 根気強い ねばり強い *忍耐強い *強硬な
*強硬な *頑強な

弱い いくじなしな ズクナシナ コンジョナシナ

①, ズクナシナ いくじがないさま。根性がないさま。語幹は名詞でもある。
「ナニ サセテモ ——ナ 奴デ 困ッタ 息子ダ」

②, コンジョナシナ 根性がないさま。ズクナシと同義。語幹は名詞でもある。

5.27 言語活動

舌たらずな 速まわしな くどい まわりくどい *流暢な *婉曲な *くどくどしい *くくだしい

無口な ダマリナ おしゃべりな シャベチョナ 口べたな 話しずきな 口八丁な
やかましい 口やかましい ろるさい 口汚ない 口はばったい 能弁な *口悪
な *寡黙な *多弁な *饒舌な *話しじょうずな *話べたな *訥弁な
筆まめな 筆ぶしょうな 達筆な *悪筆な

①, ダマリナ 口かずの少ないさま。無口なさま。語幹は名詞でもある。「ム
キナシデ ——ナ オヤジ」

②, シャベチョナ 口かずの多いさま。おしゃべり。語幹は名詞でもある。
「ロカラ 生まレタミタイナ ——ナ オナゴ」「——ト ダマリ」

5.28 利 口——ば か

ジョーナ 利口な こ利口な 賢い さとい 悪賢い ずるがしこい カドイ する
どい *利発な *賢明な *総明な *明敏な *さかしい *ごさかしい *あざと
い *知的な こすい *伶俐な *英邁な

ばかな こばかな うすらばかな うすばかな おおばかな あほうな とんまな
まぬけな フンスケナ にぶい とんちんかんな *鈍な *おろかな *鈍愚な
*鈍遅な *魯鈍な *愚昧な *暗愚な

①, ジョーナ 利口な・賢い等に対応する。子どもをほめるときなどによく使
う。「——ナ ワラシ」

②, カドイ → 5.06 の④

③, フンスケナ することにしまりがなく、どこか抜けた所があること。語幹
は名詞でもある。「——ムスコ」

5.29 気なが——気みじか

気ながな *悠長な

気みじかな 短気な タンバラナ 気早い 気早な せっかちな *性急な

①, タンバラナ 短気な・気みじかに対応する。語幹は名詞でもある。「——ナオヤジ」「——起コス」

5.30 無 欲——欲ふか

*無欲な *活淡な *清廉な

欲張りな ヨクタカリナ 欲ふかな 欲ふかい 強欲な 朋欲な 業つくばりな 勘定だかい さもしい *あこぎな *がめつい *貧欲な *貧婪な

①, ヨクタカリナ 欲ふかな・欲張りな等に対応する。「——ナ ババア」語幹は名詞でもある。

5.31 節儉——浪費

マカシイ シンシヨモチナ マテイナ カタイ カタクソナ カダカナ ネットポイ
ネットボナ 質素な 儉約な しみつたれな *けちな *けちくさい *けちくそな
*けちんぼな *しわい *せちがらい

デンボナ ぜいたくな むだな

①, マカシイ ぜいたくをしないで、むだを省き、費用をきりつめるさま。儉約。節儉。「食ウモノマデ ——クシテ シンシヨ ノコス」「——イ 暮ラシ」

②, シンシヨモチナ シンシヨモチという名詞から派生した形容動詞。シンシヨモチは、もともとシンシヨをもっている人、つまり財産家のこと。旧来の村落社会の中では財産家や財産家になれるような人は、総じて節儉家で、浪費やむだづかいをしない人であることが多い。財産家におおむね共通なこのような性格だけを抽象して、シンシヨモチという単語は、物・金銭を大事にして、浪費やむだ(粗末)なつかいかたをしない人の意味もあわせもつようになる。シンシヨモチナは、シンシヨモチのこの意味が形容動詞になったものである。「アノ人ワ ——ダカラ 雑巾ノ ハテマデ 粗末ニ シナイ」なおシンシヨモチには所帯をもつの意味もある。

③, マテイナ → 5.17 の①

④, カタイ → 6.14 の①

⑤, カタクソナ けち・けちんぼ・けちくそなどに対応する。語幹は名詞でもある。

⑥, カダカナ カタクソと同義。カタクソよりは古い感じ。語幹は名詞でもある。

⑦, ネットポイ・ネットポナ カタクソ・カダカ・けち等と同義。伊達郡旧茂庭村で採集した俚言。ネットイの意味用法・語形がずれていったものだろう。ネットポナの語幹は名詞でもある。

⑧, デンボナ 品物・金銭などを惜しげもなく、浪費したり人に与えたりすること。語幹は名詞でもある。「——ナ 息子 デキテ シンシヨ スッカリ 食ッテ シマッタ」

5.32 機敏——緩慢

すばしこい すばやい 早い 手早い 手早な 足早な 身軽い 身軽な *はしこい *手ばしこい *機敏な *敏捷な *敏活な *スピーディな
のろい ノロマコイ のろまな おそい *スローな *スローモーな *緩慢な *鈍重な

①, ノロマコイ のろい・のろまなに対応する。「嫁ノ 仕事 ——クテ ナンボニモ 見テ イランニ」

5.33 地味——はで

地味な 地道な
はでな きざな きざっぱい

5.34 やほ——いき等

やほな やほつたい やほくさい どろくさい 土くさい *不粋な
いきな *風流な *粋な *酒脱な

5.35 おおげさ・おおぎょう

おおげさな おおぎょうな *わざとらしい *たいそうらしい *誇大な *針小棒大な

5.36 きびしさ——あまさ

きびしい きつい 手きびしい 強い 厳重な 厳格な からい 強硬な *峻厳な
*峻烈な *仮借ない *厳正な
ぬるい 手ぬるい あまい いいかげんな あまっちょろい お手柔らかな

5.37 沈着・冷静

平気な *沈着な *冷静な

5.38 自暴自棄

すてばちな やけくそな やぶれかぶれな *自暴自棄な

5.39 性に対する態度

すけべえな はすっぱな ふしだらな *好色な *みだらな *淫奔な *淫蕩な
*自墮落な *けがらわしい *不貞な *卑猥な *猥雑な
*貞淑な *貞節な

① 性に対する男の態度をプラスの評価の上に立ってとらえた形容詞は、標準語にも福島北部方言にもない。また、マイナスの評価の上に立ってとらえた形容詞の中には、女についてしか使えないものがある(不貞な・はすっぱな)

5.40 男らしさ—女らしさ

男らしい 男まさりな *雄々しい *男性的な
女らしい いろっぼい *女らしい *女性的な *なまめかしい *あだな *あだっ
ぼい *あられもない

5.41 おとならしさ—こどもらしさ

おとならしい おとなっぼい オトナナ おとなげない
こどもらしい こどもっぼい 無邪気な うぶな オボコナ オンボコナ

① オトナナ おとなから派生した形容動詞。子どもの態度・みかけ・行動・性格がおとならしく、しっかりしているさま。「—ナ ワラシ」

② オボコナ・オンボコナ オボコ・オンボコから派生した形容動詞。態度・みかけ・行動・性格が幼児じみているさま。「ナンボニ ナッテモ —ナ 娘」

5.42 親子などとしての態度・行動・性格

孝行な 親孝行な 奥さん孝行な おばあさん孝行な オヤオモイナ コドモオモイ
ナ 子ぼんのうな
不孝な 親不孝な

① オヤオモイナ・コドモオモイナ 親思い・子ども思いが形容動詞に転成したもの。「オラエノ 娘ワ オヤオモイナ 奴ダ」「コドモオモイナ 人」

5.43 君臣、上司・下司としての態度・行動・性格

忠義な ケライオモイナ ブカオモイナ *忠良な
不忠な

① ケライオモイナ・ブカオモイナ 家来思い・部下思いから転成したもの。

5.44 知的—情的

りくつっぼい *知的な *理知的な *理性的な *ドライな
涙もろい *情的な *感情的な *感性的な *熱情的な *センチメンタルな *セン
チな *感傷的な *ウエットな

5.45 態度・そぶりの隠然——顕然

なにげない さりげない ひそかな

遠まわしな 遠まわりな まわり違い *婉曲な

露骨な おおっぴらな オーハバナ あからさまな あけすけな あけっぴろげな

ざっくばらんな *直截な

① オーハバナ 公然とした・おおっぴらななどに対応する。「昔ワ 届ケ
出スト ドブクモ ——ニ コシワッチャ(=こしらえられた)モンダ」

5.46 感情的態度・性格

クヤシガリナ サビシガリナ サブシガリナ ショーシガリナ オッカナガリナ イ
タマシガリナ メンドークサガリナ ウツァシガリナ etc

① 福島北部方言では、感情を表わす形容詞の語幹に接尾辞「がる」のついた四
段動詞の連用形は、名詞のほかにも形容動詞にもなり、そのような感情的態度・
性格のさまを表わす。これは、次の感覚的態度・性格以下の項目の場合も同じ。

5.47 感情的態度・性格

イタガリナ サムガリナ アツガリナ ネムタガリナ クスグッタガリナ カイガリナ

5.48 美しさ・清潔さに対する態度・性格

ウツクシガリナ キタナガリナ きれい好き

5.49 流行・新しいもの等に対する態度・性格

アタラシガリナ シブゴノミナ ハデゴノミナ

5.50 能力、じょうず——へた

有能な じょうずな 器用な うまい *たくみな *巧妙な *絶妙な *軽妙な

無能な へたな へたくそな へタカスナ 不器用な ぶきっちゃな

① へタカスナ へたな・へたくそなに対応する。語幹は名詞でもある。
「——ナコトバリ ヤッテル」

② じょうずな終止形は、ふつうジョ(-)ンタとなる。「アノ人ワ 話ガ
ジョンタ」また、仮定形は、ジョ(-)ンタラ・ジョ(-)ンタナラとなる。

Ⅵ 物・事柄の性質・状態に関する形容詞

6.01 形

丸い まん丸い まん丸な マルコイ マンマルコイ *つぶらな *まるやかな
*まどかな

四角な 四角い ましかくな

平らな 平らかな 平たい 平べったい ビッタラコイ *平坦な *平板な *扁平な

カッコイイ カッコワライ スマートな ぶかっこうな 不体裁な 不細工な ぶざまな おんぼろな

いびつな キビツラナ

頭でっかちな ずんどうな

ごつい ごっつい *いかつい

まっすぐな マツグナ

するどい *鈍い *鋭利な *先鋭な *シャープな

① マルコイ・マンマルコイ 丸い・まん丸いに対応する。なお「まるのまま」「まる4年」などの「まる」は、「マルコノママ」「マルコデ4年」という具合に「マルコ」となる。

② ビッタラコイ 平たい・平べったいに対応する。「——イ 顔(・板)」すりへって、平べったくなった下駄をビッタラゲタという。

③ キビツラナ いびつなに対応する。「荷物 一杯 ツメタラ 箱ガ ——ニナッタ」

④ マツグナ まっすぐな の訛語。「——ナ 道(・しょうね)」

6.02 大きさ——小ささ

オッキイ ズナイ ズンナイ でかい でっかい 大柄な 大振りな 大型な *大きい *巨大な *広大な *壮大な *雄大な *龍大な

チャッコイ チチャコイ チンチャコイ チンチイ メンチャコイ チャメコイ メンチイ マメコイ ちっちゃい 細かい 細かな コマコイ 小柄な 小振りな 小型な 小作りな *小さい *ちっぽけな *微細な *些細な *零細な *ささやかな *微少な *瑣末な

① コマコイ 細かいに対応する「ハサミデ 紙 ——ク 切ル」

6.03 広さ——狭さ

広い だだっぴろい 手広い *広大な *広壮な *広汎な

狭い セバイ セバコイ 手狭な 狭苦しい 窮屈な せせこましい *狭小な *狭隘な

① セバイ せまいの訛語。

② セマコイ・セバコイ せまいの俚言。道幅が狭いの狭いには、セバイ・セマコイ・セバコイの三つが使える。しかし、考え(・了見)が狭いの狭いにはセマ

コイ・セバコイは使えない。

6.04 長さ——短さ(空間的)

長い 細長い ひよろ長い 長っ細い *長大な
短い ミチカイ

① ミチカイ みじかひの訛語。「気ガ——イ」

6.05 長さ——短さ(時間的)

長い 長たらしい ひさしい 遠い ムスイ
短い ミチカイ 近い あっけない *はかない

① ムスイ 食物・道具などのながもちするさま。あっけなくないさま。「コノ
飴ワ ——クテ 仕事シナガラ シャブッテルノニ イイ」「千円ノ カネ カタ
クシテ ——ク ツカウ」

6.06 遠さ——近さ

遠い *はるかな
近い 手近な 身近な *まちかな *まちかい *卑近な
遠まわりな まわり遠い 遠まわしな *迂遠な

6.07 速さ——遅さ

速い すばやひ *速やかな *迅速な *急速な *敏速な *スピーディな
おそひ のろひ ゆるやかな *緩慢な

6.08 高さ——低さ

高い タカポイ 小高い うず高い
低い

① タカポイ 小高いに対応する俚言。「畑ノ 真ソ中サ 土 盛ッテ ——ク
スル」

6.09 水平——垂直, 勾配

平らな 平らかな 水平な 垂直な カタツラナ ななめな ならかな ゆるやかな
な ゆるひ 急な けわしい *険阻な *峻険な

① カタツラナ ななめの状態。「着物 ——ニ 着ル」

6.10 太さ——細さ

太い ふっとい コブトイ
細い ホソコイ 長っぼそひ ひよろ長い *かぼそひ *繊細な

① コブトイ ちよっと太いこと。「——イ 枝」

② ホソコイ 細いの俚言。「——イ 糸(・道・線)」ただし細い声の細いをホソコイとはいえない。

6.11 厚さ——薄さ

厚い 厚ぼったい アツボイ 分厚い 分厚な
薄い うすっぺらな

① アツボイ 分厚いに対応する。「——イ 本(・布地)」

6.12 濃さ——薄さ, 疎——密

濃い *濃厚な *濃密な *密な *稠密な
薄い まばらな *淡い *淡泊な *稀薄な

6.13 深さ——浅さ

深い 奥深い 根深い どろふかい *深遠な
浅い アサコイ 浅浅な

① アサコイ 浅いに対応する。「——イ 川(・谷レ物)」ただし傷が浅い・考えが浅い・浅い緑色等の浅いをアサコイとは言えない。

6.14 重さ——軽さ

重い 重たい *過重な
軽い カルコイ *軽やかな *軽快な *スポーティな

① カルコイ 軽いの俚言。ただし、罪(・病氣・責任・味・気分)が軽いの軽いをカルコイとは言えない。

6.15 かたさ・こわさ——やわらかさ・ゆるさ

カタイ こわい
ヤッコイ やわい やわらかい やわらかな ゆるい ニルコイ *柔軟な *軟弱な

① カタイ 標準語のかたいに対応するが、意味の広がりには次のように、かたよりも広い。㉗, 力を加えても、形が変わりにくい。「石ワ ——イ」←→ヤッコイ㉘, しっかりとしめつけた状態にある。「手 ——ク 握ル」「結び目ガ ——イ」←→ゆるい・ニルコイ㉙, 確かだ。ゆるがない。「コノ分デワ 1反歩カラ 8俵ワ ——イ」㉚, 堅実で、あぶなげがない。「——イ 商売」「アノ人ノ 仕事ワ ——イ」「ロガ ——イ」「守リガ ——イ」㉛, 四角ばって、くだけたところがない。かた苦しい。「ソナナニ ——ク ナンナ」「——イ 話」㉜, かたくなだ。がんとで融通がきかない。「頭ノ ——イ トショリ」㉝, 義理がたい。律義だ。

「ソソナニ ―ク シテ モラッテワ カエッテ コッチガ イタミイル(=恐縮する)」⑦, むだづかいをしない。また, 物をむやみに人にやったりしない。カタクソだ。「―クシテ シンシ ヌ ノコス」

② ヤッコイ やわらかいと部分的に対応する俚言。⑦, 物質・物体のかたくないさま。「―イ 豆腐」②, 頭の働きが一人前以下であるさま。また, 意志・根性が強固でなく, ぐうたらなさま。「本家ダナンテ 威張ッテダッテ 少シ 頭ノ ―イ 家督 デット シンシ ヌモ タチマチダ」「根性が ―イ」ただし, やわらかい布団(・手ざわり・身のこなし・日ざし・態度)等のやわらかいをヤッコイとはいえない。

③ ユルコイ ゆるいと部分的に対応する。⑦, 物質が水分を多く含み, やわらかいのを通りこして, 流動的な状態にあるさま。「―イ 粥」←→かたい・こわい④, しまりかたが強くない。「帯ガ ―イ」←→きつい ただし, 勾配がゆるい・スピードがゆるい・取締りがゆるい等のゆるいをユルコイとはいえない。

6.16 しなやかさ―もろさ

シンナラコイ シナッコイ シナコイ *しなやかな *強靱な もろい *脆弱な

① シンナラコイ・シナッコイ・シナコイ しなやかなにほぼ対応する。物体が弾力に富んでいて, 柔らかさがあるさま。「干シ大根が ―イ」「ナマノ枝ワ ―クテ, オシ ヌリニクイ」ただし, しなやかな体(・指), しなやかに歩くなどのしなやかをシンナラコイ・シナッコイ・シナコイとは言えない。

6.17 ねばりけ

ねばい ねばっこい

6.18 じょうぶさ―よわさ

じょうぶな 頑丈な 強い ツオイ *堅牢な *強靱な *堅固な
よわい もろい ヤハナ *よわよわしい *脆弱な

① ツオイ 強いの訛語。

② ヤハナ つくりががんじょうでないさま。よわくて, もろいさま。「コノ 噴霧器 安イゲンチ ヌ 作りガ ―デ 駄目ダ」

6.19 激しさ・強さ―弱さ

激しい 強い きつい 過激な 猛烈な すごい ものすごい ひどい こっぴどい
*激越な *激烈な *強烈な *すさまじい

弱い おだやかな *よわよわしい

6.20 力・勢力

有力な 強い こわい 手ごわい 力強い 根強い 強力な *有勢な *強大な
*強固な

無力な 弱い もろい 貧弱な *よわよわしい *弱体な *弱少な *脆弱な *薄
弱な

6.21 色

白い 真白い 真白な 白っぽい 青白い 色白な *生白い *なまっしろい

黒い 真黒い 真黒な 浅黒い 黒っぽい 薄黒い どす黒い 青黒い

赤い 真赤な 赤っぽい 薄赤い

黄色い まっきいろな 黄色っぽい まっきいろい

青い 真青い 真青な 青っぽい

*多彩な

6.22 におい

くさい こうばしい カブレクサイ こげくさい 青くさい なまぐさい ヒナクサ
イ 泥くさい 土くさい 血なまぐさい ～くさい *かびくさい *きなくさい
*かんばしい *かぐわしい *芳醇な

① カブレクサイ かびくさいの俚言。福島北部方言では、標準語のかびるに
対応する動詞はカブレルである。

② ヒナクサイ きなくさいの俚言。衣類・布きれなどのこげるにおい。

6.23 味

うまい ウンマイ ソソッパイ 甘い 甘ったるい 甘口な あまからな 辛口な
辛い スカイ アマズッカイ しょっぱい 苦い ほろ苦い 渋い えぐい エゴ
イ えがらい えがらっぽい エラカライ くどい しつこい 大味な ゴソッパ
イ 濃い 薄い *おいしい *まずい *美味な *甘美な *酸い *酸っぱい
甘酸っぱい *塩辛い *淡泊な *濃厚な

① ウンマイ うまいの訛語。

② ソソッパイ 食物の舌ざわりがザラザラして、よくない「コノ 大根葉
——クテ ウマク ナイ」

③ スカイ・アマズッカイ 酸い・甘酸っぱいに対応する俚言。

④ 福島北部方言の辛いには、唐辛子が辛いという場合の辛いの意味だけで、塩

辛いの意味はもっていない。

⑤ 福島北部方言には、標準語のまづいに対応する形容詞がない。この意味はうまいの否定形で表わすほかに方法がない。

⑥ エラカライ もみがらを焼きぬかにするために燃やしたときの煙がのどを刺激した感じなどを表わす俚言。これにびったり対応する標準語の形容詞はない。

⑦ エゴイ えぐいの訛語。春、山野に自生する山菜の一種にエゴナというのがある。標準語で何と呼ぶか知らないが、これを食べたときの味がまさしくエゴイそのものである。つまりエゴナは、エゴイ菜のことである。

⑧ ゴソッパイ 伊達郡旧茂庭村で採集した俚言。食物の大味なさまを表わすという。粗い・ざらざらしたの意味もある。

6.24 明るさ—暗さ

明るい うす明るい *輝しい

暗い うす暗い 真暗な *ほの暗い *暗黒な

6.25 鮮明さ・明瞭さ

あざやかな *明瞭な *鮮明な *明白な *さだかな

かすかな ほのかな おぼろな おぼろげな *あわい *さやかな *不明瞭な *不鮮明な

6.26 温度

あつい 寒い うすら寒い 肌寒い つめたい ひゃっこい あったかい あったかな
な なまあったかい 暖かい 暖かな 生暖かい ぬるい なまぬるい スルマコイ
スルコイ 涼しい *むしあつい *温暖な *温和な *ぬくい *冷やかな
*寒冷な *冷涼な *清涼な

① むしあつuiに対応する形容詞がない。その代わりにウムレルという動詞がある。「キューワ 朝カラ ウムレル 天気ダナイ」

② スルマコイ・スルコイ ぬるuiに対応する。「風呂(・コタツ)ガ —イ」

6.27 音・声

そうぞうしい さわがしい にぎやかな やかましい うるさい 静かな もの静かな
な 高い 低い 強い 弱い 太い 細い かすかな 黄色い オッキイ ズナイ
ズンナイ でっかい チャッコイ チチャッコイ チンチャッコイ チンチイ ちっ
ちゃい 明るい 暗い あまい あまったるい しぶい *かんだかい *けたたま

しい *高らかな *声高な *大きい *小さい *閑静な *閑寂な *静穏な

6.28 乾—湿

しめっぼい シケッポイ みずっぼい *多湿な *湿润な

- ① 乾いている状態を表わす形容詞は標準語にも方言にもない。
② シケッポイ しめっぼいに対応する。

6.29 美しさ—みにくさ

美しい ウツクシイ きれいな こぎれいな *うるわしい *はなやかな *はで
やかな *優美な *華美な *華園な *みやびやかな
ミグサイ ミッタクナイ *みっともない *みにくい *みぐるしい *醜悪な

- ① ウツクシイ・きれいな・ミグサイ・ミッタクナイについては、1.3の③
④を参照。

6.30 清潔—不潔

清潔な きれいな こぎれいな *清い *清らかな *清浄な *清冽な
不潔な 汚ない うすきたない こきたない きたならしい むさくるしい むさい
*不浄な

6.31 地味—派手

地味な 渋い 質素な 素朴な
派手な はなやかな げばげばしい あざやかな *豪華な *きらびやかな *デ
ラックスな *はなばなしい *毒々しい

6.32 古さ—新しさ

古い 古くさい 古めかしい 旧式な *陳腐な
新しい まあたらしい 新たな モダンな 新式な 新鮮な みずみずしい 目新し
い 耳新しい *斬新な *清新な *新奇な

6.33 安全・平穩—危険

安全な 大丈夫な 無事な 平穩な おだやかな 無難な *安穩な *安泰な
あぶない あぶなっかしい 危険な ユピセイ *あやうい *険呑な *険悪な

- ① ユピセイ 伊達郡旧茂庭村で採集した俚言。あぶない・危険なに対応する。「火ノ ハダ(=火の側)—イカラ 気ツケロ」

6.34 たしか—あいまい

確かな 正確な 確実な 明確な *的確な
ふたしかな あやふやな あいまいな うやむやな 不正確な 不明確な *不的確
な

6.35 容易——困難

むづかしい こむづかしい コワイ 無理な 動詞連用形+にくい(注1) 動詞連用形+づらい(注2) *不可能な *困難な *不能な *至難な *晦渋な
 やさしい なまやさしい ヤサシコイ ぞうさない わけない 容易な 楽な 簡単な たやすい 手軽な 動詞連用形+やすい(注3) *平易な 安易な *安直な *可能な

① コワイ→3.04の①

② ヤサシコイ→4.01の③

注1 言にくい・やりにくい・話しにくい・書きにくいなど。

注2 言いづらい・やりづらい・話しづらい・書きづらいなど。

注3 言いやすい・やりやすい・話しやすい・書きやすいなど。

6.36 複雑——単純

複雑な ややこしい 微妙な 繁雑な
 単純な 簡単な 手軽な 手短な 簡素な *簡潔な *簡約な *簡明な

6.37 簡潔——冗長

手短な 簡単な 短い *簡潔な
 長い 長ったらしい 散漫な *冗長な *冗漫な

6.38 精密——粗雑

精密な 精巧な *巧緻な *緻密な
 粗雑な 雑な 粗末な ざっぱくな ずさんな

6.39 細かさ・くわしさ——粗さ

細かい コマコイ 細かな くわしい 明細な 緻密な 綿密な 詳細な *精細な
 *微細な *克明な
 粗い 粗っぽい 大ざっぱな 大まかな 大づかみな ずさんな *粗雑な

① コマコイ 細かいに対応する。

6.40 多様——一様

いろいろな さまざまな とりどりな *多様な *雑多な *種々な
 一様な 一律な *単一な *均一な *画一的な *単調な *千篇一律な

6.41 統一——不統一

ふぞろいな まちまちな ちぐはぐな めちゃくちゃな 不規則な *無秩序な *不統一な *乱雑な *乱脈な *支離滅裂な
 規則正しい 規則的な *統一的な

6.42 珍奇・異様——普通

珍らしい 妙な 変な おかしい あやしい あやしげな 風変わりな 奇妙な へんてこな 不思議な 奇抜な 突飛な 不自然な 異常な *珍妙な *異様な *奇異な *奇矯な *特異な *珍奇な *奇怪な *奇々怪々な *新奇な *神秘的な *靈妙な

普通な ありきたりな 自然な 月並みな 世間並みな 人並みな 十人並みな 尋常な 平凡な あたりまえな 正常な *凡庸な

6.43 非凡・卓抜

非凡な *卓抜な

6.44 当然——不当

当然な あたりまえな もっともな 正当な 順当な *至当な
不当な とんでもない

6.45 異 同

同じな そっくりな 同様な 同然な 共通な まぎらわしい *等しい *等質な
反対な あべこべな 正反対な さかさまな 逆な 千差万別な *異質な *対蹠的な

6.46 適——不適

ふさわしい につかわしい 相応な 妥当な 適当な 手ごろな 適度な 穏当な
適正な 適切な
ふつりあいな 不向きな 不相応な 不適當な 不適切な

6.47 便——不便

便利な 重宝な *簡便な *軽便な
不便な

6.48 必要——不必要

必要な 入り要な ヨーナ *有用な *入用な *不可欠な
不必要な 不用な 無用な

① ヨーナ 必要な・入り用な・入用な等に対応する。「——ナ 物ワ 何デモ買ッテ ヤル」

6.49 完全——不完全

完全な じゅうぶんな
不完全な ふじゅうぶんな はんぱな 中途はんぱな

6.50 都合——不都合

好都合な

不都合な

6.51 好調——不調

好調な 順調な 快調な

不調な

6.52 純粹——不純

純粹な 生粋な *純な *純正な

不純な

6.53 でき——ふでき

見事な りっぱな すばらしい 上出来な 上等な 上乘な 結構な *透逸な *素敵な

不出来な 粗末な 下等な 貧弱な しだらない つまらない コツツァカナイ
サッチャクナイ ユクズナイ ヘデナイ

① コツツァカナイ くだらい・つまらない、または、ばかばかしいほどに質がおちているさま。「高イ カネ 出シテ ——イ モノ 買ッテ キタナ」「助平ナコトバリ 語ッテ ——イ ヤロダ」なお、コツツァカナシは、コツツァカナイ言動をする者の意の名詞。

② サッチャクナイ シャッチャクナイともいう。コツツァカナイと同義。サッチャクナシもコツツァカナシと同義の名詞。

③ ユクズナイ くだらなくて、役に立ちそうもないさま。人間にも使う。「古道具屋デ ——イ モノ 買ッテ クル」「アイツワ ノーメスコギデ ——イ ヤロダ」ユクズナシは、役に立ちそうもない、くだらない人の意の名詞。

④ ヘデナイ ヘデモナイともいう。くだらない・つまらない等の意。また、いい加減で、でたらめなの意味もある。「——コトバリ 語ッテル 奴ダ」「——モノ アズベテ 喜ンデル」ヘデーナシは、ヘデナイこと、または、ヘデナイことをする人の意の名詞。

6.54 良——不良

よい いい よろしい *良好な *優良な *純良な

悪い ワリイ 悪質な 不良な *粗悪な *極悪な

6.55 特別・独特

特別な 格別な 独特な *独自の *特有な *特殊な *個有な *無類な *異例な

6.56 重要・主要・重大

大事な 重要な 大切な 貴重な 重大な ゆゆしい 主な めぼしい *主要な
*肝要な *枢要な *緊要な

6.57 変化・動き

活発な さかんな 旺盛な 不安定な 自由な *動的な *円滑な *スムーズな
*可変な
*不変な *静的な *不自由な

6.58 損得・効果

損な 不利な 不利益な むだな だめな 無益な
得な 有利な 有効な 有益な 徳用な 有用な

6.59 有害——無害

有害な 有毒な
無害な

6.60 高価——廉価

高い *高価な
安い 格安な 割安な 安っぽい *廉価な *安価な

6.61 緊密・密接

*緊密な *密接な

6.62 数・量

多い たくさんな もりたくさんな じゅうぶんな ばくだいな *おびただしい
*ゆたかな *豊富な *潤沢な *多額な *無尽蔵な
少ない スケナイ わずかな ワンズカナ とぼしい はんばな *僅少な *少額な
*軽少な *少額な

① スケナイ 少ないの訛語。

② ワンズカナ わずかなの訛語。

6.63 程度

ひどい べらぼうな 大変な えらい けたはずれな 徹底的な 極端な 法外な
とてつもない 重い 軽い 大きい 小さい 相当な まっかな なまはんかな
いいかげんな *はなはだしい *いちじるしい *適度な *過度な *深長な *甚
大な *絶大な

6.64 存在

ない からっぽな がらんどうな まれな *むなし *うつろな *空疎な *空虚な
 ありがちな しがちな ありきたりな 珍らしい

(注1) エンナカは、音声表記をすれば、[ɛnnaga] [innaga] [ɛnnaka] [innaka] となる。親族も、福島北部方言の音声では [sɪndzogu:] [sũndzogu:] [sɪndzokũ:] [sũndzokũ:] となる。しかし、この報告では、エンナカ・親族と表記して、そのすべてを代表させることにする。以下第2部福島北部方言の形容詞の場合も含めて、方言語彙の表記は、すべての方式による。

(注2) 念のためにつけ加えれば、本家——新宅は、A——B・C, B——d・e・f, c——g・h, e——i・kの関係をいい、大本家——コシタクは、A——d・e・f・g・h, B——i・kの関係をいう。また、大本家——コシタクの相対的な意味として、A——i・kの関係も大本家——コシタクの関係にあるという。

(注3) この課題については、昭和42年度中に「親族語彙の用法の構造と社会構造との関連について——福島北部調査報告3——」というレポートをまとめる予定である。

(注4) たとえば、オトツツァマ(オッカサマ)ノ イトコのように、父母を表わす単語とイトコを組合せた形で表現するのが普通である。

(注5) たとえば、オジンツァマ(オバンチャマ)ノ イトコのように、祖父母を表わす単語とイトコを組合せた形で表現するのが普通である。

(注6) この関係は、またいとこの側からは、ふつうオトツツァマ(オッカサマ)ノ イトコのように、父母を表わす単語とイトコを組合せた形で表現する。いとこの側からは、たとえば、イトコノ コのように、イトコと子を表わす単語を組合せて表現するのがふつうである。

(注7) 福島北部方言の形容詞の場合、ある一つの文法的意味を表わす語形に二つないし三つ以上のものがある。たとえば、agaɸ, age(:) (標準語の赤い)の本詞形の断定・現在(または過去)・肯定(または否定)の文法的意味を表わす語形には次のようなものがある(これ以外の文法的意味を表わす語形は省略。なお表記は簡略音声表記による。)以下それぞれの形容詞の意味用法を記述していく上で、必要に応じて用例をあげてある。しかし、あげたのは、一、二の語形であって、それぞれの形容詞の文法的カテゴリーに属する全部の語形を併記することまではしていない。

a, 断定・現在・肯定

agaɸ・age(:)

b, 断定・現在・否定

agagũ ne(:)・agagũ naɸ

age(:)gũ ≧ ・age(:)gũ ≧

agaɸgũ ≧ ・agaɸgũ ≧

c, 断定・過去・肯定

agagatta ・agagattatta

age(:)gatta • age(:)gattatta

agaęgatta • agaęgattatta

d 断定・過去・否定

agagü ne(:)gatta • agagü ne(:)gattatta

age(:)gü ≧ • age(:)gü ≧

agaęgü ≧ • agaęgü ≧

agagü nagatta • agagü nagattatta

age(:)gü ≧ • age(:)gü ≧

agaęgü ≧ • agaęgü ≧

(注8) 福島北部方言のウツクシイには、beautiful の意味のほか、clean の意味もある。

① 「——イ 花(・紅葉・山・景色・姿・唇・声・天然色ノ 映画)」

② 「若クテ ——イ オナゴヒト(=女の人)」

③ 「年頃ニ ナッテ ダンダン ——ク ナル」

④ 「——ク 着飾ル」

⑤ 「着物 洗濯シテ ——クスル」

⑥ 「散ラカシタ 部屋 片ヅケテ ——クスル」

⑦ 「——ク 掃除スル(・拭ク)」

⑧ 「——イ 水(・空気・湯)」

上の用例で、①②③④は beautiful の意味、⑤⑥⑦⑧は clean・清い・清潔な の意味。標準語の美しいには、①～④の意味用法はあっても、⑤～⑧の意味用法はない。福島北部方言では、これら全部の用例をきれいで置きかえようと思えば、置きかえられないことはない。しかし、置きかえると、かなり標準語めいたニュアンスがともなりようである。特に①～④の用例をきれいで置きかえるのと、⑤～⑥の用例をきれいで置きかえるのとでは、前者のほうが一層標準語めいたニュアンスを感じさせるようだ。これは、福島北部方言のきれいが本来 beautiful の意味を分担していなかったからであろう。福島北部方言のきれいは、clean の意味もさることながら、次のような意味で使われることが最も多いのだ。「借金 全部 ——ニ ナシタ(=返済した)」「ーツモ 残サナイデ——ニ 食ッチマッタ」「——サッパリ 忘ッチャ(=忘れた)」

(注9) モゴイ・モゴサイとメゴイ・メゴコイ・メンコイの間に、福島北部方言の場合次の用例にもみられるように、意味用法の上ではっきりした違いがある。「顔 ナンボ 不器量デメゴクナクテモ 我ガ子ダ。モゴサイコトニ 変ワリワ ナイ(=顔がいくら不器量で、かわいらしく(または、かわいく)なくても、自分の子どもだ。かわいいことに変わりはない)」

(注10) 労働に対する人間の態度をマイナスの評価で表わす単語として、次の二つを追加する。

カイナイ カイナシナ

①. カイナイ ふつう [kɛ : ne(:)] と発音する。働きが一人前以下であるさま。甲斐性がないさま。「ノーメスコキデ ——イ ヤロダ」

②. カイナシナ ふつう [kɛ:naʃi:na] と発音する。意味は、カイナイと同じだが、名詞にもなり、そのような状態であること、または、そのような人の意味にもなる。「——ナコトバリ シテル オナゴ」「——ヤロ」

(注11) マテイは、児玉氏「福島県方言辞典」その他では、標準語のていねいにあたる単語とされている。しかし、マテイは必ずしも ていねいと 同義であるわけではない。たとえば、「ていねいにお辞儀をする(・あいさつをする・ものを言う)」などの場合におけるような、*politely*・*courteously* などの意味におけるていねいは、福島北部方言でも、ていねいであって、これをマテイで置きかえることは出来ない。

この意味で、本文で、「㊦、礼儀にあついさま。」としたのは、行きすぎであったかも知れない。㊦にあげた用例でのマテイは、ていねいで完全に置きかえることができるものだが、この用例は、むしろ㊧に入れたほうが良いのかも知れない。

つまり、マテイの意味は、本文に記したように、「することが粗雑(・いいかげん・ぞんざい・大ざっぱ)でないこと」にあるのであって、そのような行動の、ある場合における、ある側面が結果的にみて、礼儀にあついさま・ていねい・*politely* という姿をとるにすぎない、と解釈することのほうが良さそうである。今後の調査を必要とする。